

## 春日若宮おん祭の近世田楽頭役記録

『観音院頭屋棟梁日記』及び『斤中漫録』田楽頭役記事の紹介

Research Materials

福原敏男

## 解説

筆者はこれまで奈良市春日大社若宮社の祭礼（通称おん祭）に催される芸能や競技を勤める頭役組織に関する史料紹介・研究を発表してきた<sup>①</sup>。特に、流鏑馬と馬長を裏で支える祭祀組織、頭役勤仕の次第（それが記された時代には守られなくなりつつあった頭役勤仕のあるべき姿）について考察を行なった。おん祭に演じられる諸芸能の頭役の中心は、興福寺学侶（室町時代には別当や衆徒が田楽頭を勤仕する例も見られるようになる）が毎年交替して勤仕する田楽頭であり、その組織はおん祭が始まった保延二年（一一三六）から近世幕末まで続き、流鏑馬頭人である願主人とならぶおん祭の主役なのである。田楽頭は頭役の名称でもあると同時に、田楽頭人その人自体をもさす。

『若宮祭礼記』<sup>②</sup>によれば、おん祭が始まった保延二年からすでに田楽が参加しており、同一四年までは「田楽二村」の記述、その後「田楽二座」と記されるように、はじめから田楽の二集団が参勤したのである。同書保延二年・久安五年（一一四九）条によると、すでに興福寺の僧綱

または已講の僧から二人が選ばれて田楽頭を勤仕している。このように、二座の田楽座を維持・監督するので二人の頭が必要なのであり、それぞれの頭屋が一座ずつの田楽を分担して差配した。

中世におけるおん祭田楽頭の先行研究として、伊藤磯十郎<sup>③</sup>、近江昌司<sup>④</sup>、鈴木良一<sup>⑤</sup>、遠藤基郎<sup>⑥</sup>、安田次郎<sup>⑦</sup>諸氏の蓄積がある。また、奈良田楽座に關しても、能勢朝次氏による研究を嚆矢として、研究が蓄積されている。中世の田楽頭勤仕の史料としては、『大乘院寺社雜事記』・『経覚私要鈔』・『多聞院日記』などの諸日記があり、『日本庶民文化史料集成』第二卷（田楽・猿楽）<sup>⑧</sup>に、『春日若宮御祭田楽頭役日記』として長祿四年・寛正四年・永正一七年份が収録されている。

近世田楽頭の記録としては、田楽の演者、芸能者側の史料が知られており、前掲『日本庶民文化史料集成』第二卷には現在も祭礼に出動している大和郡山の伊藤家伝来の史料が『春日若宮御祭出動田楽座記録』と総称されて翻刻されている。なかでも、『春日若宮祭礼 田楽勤務式順実記』（一八世紀末）は詳細を極めている。山路興造氏の解題によると、伊藤家には天保十一年（一八四〇）の『春日若宮祭礼田楽記録 田楽役人頭坊ニテ之次第』なる史料も伝来しているそうであるが筆者未見であ

る。

近世の田楽頭に言及しているのは、高野辰之氏と伊藤磯十郎氏<sup>(11)</sup>の著作であり、特に後者は伝来の記録を渉猟された確かな分析を加えられている。しかし、史料の性格上、近世都市奈良町を舞台に繰り広げられる「都市祭礼としてのおん祭」を描き出す視点は用意されていない。

最近、幡鎌一弘氏は餅飯殿町大宿所の正徳元年（一七一二）運営記録を紹介・研究され<sup>(12)</sup>、この史料が祭礼研究に資するのみではなく、近世都市奈良町の研究にとって重要であり、おん祭は奈良町を研究するための一素材となることもわかってきた。

以上の研究史を踏まえ、本稿では奈良県立図書館所蔵『観音院頭屋棟梁日記』一冊と（請求番号一八八・二四五―三九）、及び『庁中漫録』三四の「春日若宮祭礼記」より田楽頭記事の抜粋を翻刻、紹介する。

『観音院頭屋棟梁日記』は天保十一年（一八四〇）、興福寺の子院観音院の栄憲が田楽頭役を勤めるに際して筆写した、春日若宮おん祭における田楽頭勤仕の実態を余すところなく伝える記録である。体裁は冊子本、一〇七丁、縦二四・五、横一六センチである。

その主な内容は前半部が九月から十一月までの頭役勤仕日程、後半部が祭礼に関する諸文書（主に廻章）書式である。

本書と関係の深い史料が、前掲伊藤氏『田楽史の研究』に附録第十五『頭屋棟梁日記』として紹介されている。『頭屋棟梁日記』には、「頭屋に関する人数」、「諸下行米の覚」、「諸書物の覚」が摘記され紹介されているのみであるが、『観音院頭屋棟梁日記』と酷似している。『観音院頭屋棟梁日記』には朱で訂正、後注などが書き加えられているところから、栄憲が『頭屋棟梁日記』ないし、その祖本に註を施し、訂正を加えた可能性が指摘できる。

また、『庁中漫録』は奈良奉行所与力の玉井定時（一六四六―一七二〇）およびその子孫の著述・写本であり、現在も御子孫の玉井家の所蔵

である。

この史料を理解する前提として、近世の田楽頭について若干述べておきたい。

平安末期に田楽などの專業芸能者が出現し、京都や奈良の大寺を本所とする芸能座が形成されはじめる。それに伴い、芸能を興行する権利である上演権とでもいえるべき楽頭職が成立し、それは元来、それぞれの座が属する本所に掌握されていた。鎌倉時代以降、芸能座の座頭（職業芸能者）が楽頭職を寺社より獲得する事例が見られるようになり、それが芸能集団の存立基盤の確立を促す要件となった<sup>(13)</sup>。

しかし、おん祭においては幕末まで興福寺側が楽頭職を掌握し、別会五師より差定された田楽頭が楽頭を兼ね、田楽座を監督・統轄し、公式の給録として新調の田楽装束を田楽座に与えた。この儀式、「装束給（賜・渡）」は形式的であろうとも、それは興福寺という本所に対する田楽座の隷属性を象徴している。これが幕末まで続いた要因として、奈良田楽座が形成された環境が古代国家の残影を色濃く残す興福寺組織であったことが指摘されている<sup>(14)</sup>。

田楽頭と、楽頭職を掌握している楽頭は同一人物であったので、楽頭法師として田楽頭の代理人をたてた。つまり、田楽座の長である一鷹法師と田楽頭の代理である楽頭法師（御幣持ち）が存在した。

この春日田楽独特の頭屋と楽頭のあり方が、大和東部高原（東山中）の村落祭祀に反映している。柳生では、祭りのトーヤに決まることを「ガトウにあたった」と呼んでいた。大柳生では、八月一七日の太鼓踊りが「ガトウ踊り」とも呼ばれていた。この踊りは、一年間自宅「明神さん」を祀り、秋祭りのトーヤとなる者への奉納の踊りで、現在のトーヤは近世文書では楽頭と記され、かつてはガトウと呼ばれていた。トーヤは、お渡り衆・渡御衆を自宅に泊め、もてなし、集団で潔斎し、トーヤから宮へ渡り、田楽を奉納する形式をとっている<sup>(15)</sup>。

田楽衆社参の先頭には御幣を持ったトーヤが先導する例もある。以上のように、トーヤが田楽奉納のスポンサーたる田楽頭と一座の楽頭の双方を兼ねているのである。これは春日田楽の頭役組織の影響であろうが、春日の場合は規模が大きいため、田楽頭の代理として楽頭法師を立てたのであろう。

田楽頭二人はそれぞれ装束給を行う坊舎（これを田楽頭屋と呼ぶ）を選んだ。本来は田楽頭の自坊、または関係の深い興福寺院坊を選んだ。田楽頭にとつては、装束給と、田楽法師が与えられた装束を着して演じる頭屋能からなる頭屋式こそおん祭の最高潮であり、『観音院頭屋棟梁日記』が最も詳細に記している事項なのである。田楽頭を勤仕しても、衆人環視する祭礼の表舞台においては特に目立つ役割はなく、頭屋式こそ一世一代の晴れ舞台であるといえる。

近江氏が指摘しているように、『若宮祭礼記』久安四年（一一四八）九月一七日条に「御祭馬長共雑色八人、并田楽十人、装束各様之色々令調奉給、即弁公達二人僧綱屋 御着物給」とあり、僧綱屋における「御着物給」は平安末にはすでに確認できる。

中世の田楽頭は、田楽法師への纏頭をはじめ、祭場の舗設や饗宴など祭礼に関わる一切の費用を調達しなければならない、祭事の主宰者、経済的負担者である。安田次郎氏の研究<sup>(17)</sup>によれば、一五世紀半ばに大乘院尋尊が田楽頭を勤めた時の田楽装束代や作事料・饗宴などへの支出は約三七〇貫文であり、この散財は当時の尋尊の、最少の年間現金収入を上回るものであった。

興福寺の政治的・経済的な衰退に伴って、出費節約のため一五世紀後半から、一ヶ所の頭屋に田楽両楽頭、両座が出仕し、共に装束を給する事例が出てくるという。<sup>(18)</sup>

室町中期以降の田楽頭は門跡別当から、衆徒に至るまで広い範囲から補任されるようになるが、ほとんどは衆徒の手によって選出され、田楽

頭も彼らの意のままに動いたのである。近世に入ると、「田楽は衆中の催」（『中臣祐範記』慶長一九年（一六一四）十一月二日条）と、全く衆徒の手に委ねられる。<sup>(19)</sup>

近世においては、興福寺からの下行米によって田楽頭が維持されたのである。一七〜一八世紀の『庁中漫録』には「田楽頭屋坊乃下行式百六十二石八斗式升なり、興福寺乃唐院より出る也」とあり、明治三年（一八七〇）の『春日社若宮祭図解』においても、「就祭礼租税倉<sup>ヨリ</sup>下行之事」として「田楽座頭役儀式料 二六二石八斗二升」とあり、近世を通じて田楽頭への下行米（本座・新座両座分）が一定であったことがわかる。ちなみに、『春日社若宮祭図解』によると、おん祭全体の合計では玄米四三二石八斗三升二合が興福寺から下行されているので、明治初年ではおん祭全体の支出に占める田楽頭の割合は約六割を占める。同史料によると、衆人参動料が百石、他の諸芸能者の参動料が数石であったのに対して、田楽頭への下行米は圧倒的に多い。

ところで頭屋が一ヶ所になったといっても、田楽頭は二人差定された。このことと関連する還頭という制について触れておこう。還頭とは、田楽頭の既経験者が再び差定・補任され、はじめて差定された田楽頭（正頭人）と組み、正頭人の顧問役、師範役となることである。『学侶集会評定』<sup>(21)</sup>によると、還頭には正頭人より田楽装束と料米一〇石が遣わされる。顧問料、師範料なのであろう。経済的に二頭屋の維持が難しくなった時、還頭という制が成立し、表面的には田楽頭二人が差定され、その一人を還頭で補い、実質は一頭人（正頭人）となり、饗宴などの回数も減り、費用が節減されたのであろう。

前述したようにすでに一五世紀後半から一頭屋の史料が見え始めるが、後掲の『庁中漫録』では寛文一一年（一六七二）より田楽頭が一院となったとしており、この時点で、実質的一頭屋が制度化、公認されたのであろう。『若宮御神事諸例』に引用される「胤周記」<sup>(22)</sup>によると、寛

文一二年の頃より還頭の制ができたとしている。田楽頭屋が実質的に一ヶ所になったことと、還頭とは表裏一体の関係にある。

『春日大宮若宮御祭礼図』の挿図に「田楽法師能之図」があり、楽頭（田楽頭の代理で御幣を守護する）と幣持が二人ずつ見物している。つまり、一つの頭屋に田楽両座が参動している。七〇・七一頁の『春日神幸図』（国立公文書館内閣文庫蔵）の装束給図でも同様で、「田楽新座本座装束渡」と記される。一つの頭坊で新座・本座両方の「装束給」が行われている。六六・六七頁の同「頭屋能図」においても両座の楽頭と幣持ちは前図と同じ場所に描かれているので、やはり一つの頭坊で田楽能が演じられたのであろう。六八・六九頁の『春日祭礼興福行事』（国立公文書館内閣文庫蔵）「田楽能図」にも両座の楽頭・幣持が描かれ、同「装束給図」手前に本座二三人、向こうに新座二三人と墨書されている。つまり、この資料でも両座は同一の頭坊に出仕したのである。

さて、観音院の栄憲は、興福寺第二十六代法印大僧都で、観音院中務卿、兵部卿とも称し、衆徒の別所刑部（刑部光映）の男である。<sup>23</sup>

文政一〇年（一八二七）三月一二日法師、天保七年（一八三六）四月二二日大法師に叙せられ、天保一〇年一〇月三日擬得業、同一年一月二五日擬講、同一年三月四月一五日権律師、弘化二年（一八四五）六月二日律師、嘉永元年（一八四八）正月一六日権少都、嘉永四年八月九日権大僧都に任ぜられた。天保一四年から嘉永二年まで五師を勤め、安政元年（一八五四）一〇月二六日法師大僧都、文久三年（一八六三）一〇月維摩会講師、文久三年一二月維摩会探題に宣下されている。天保一年一二月二五日、擬講に任ぜられたのは、栄憲の田楽頭屋式前日であるので、おん祭の田楽頭動仕に伴う転任があったようである。

最後に『観音院頭屋棟梁日記』の前半部の要点を以下に摘記しておく。

9月頃 頭屋より棟梁二五人、御幣手伝いの衆として四、五人を依頼す

る。

9月吉日 頭屋役人と内々のものが仁王経の祈祷をする。

10月初亥日（月三亥の時は中亥）天川弁財天へ代参して奉納する。御師より頭屋へ奉納品が献ぜられる。

10月末 手伝いの衆に対し二、三度饗宴を催すが、近年は省略されることが多い。

10月下旬 頭屋より例年の祈祷である大般若経転読の相談をする。

10月 田楽の笛と笠を一条院と大乗院に依頼し、承諾すると頭人は竹葉一荷を献上し、金銭の場合は青銅二〇疋を頭人が直接持参する。日出山対馬守に対し、下部（しもべ）を使者として太刀二本、小刀二本を奉納する。

11月朔日 田楽法師の両座惣代の二人が楽器を持参する。楽器を請け取り中門へ置く。対屋において田楽両惣代に祝酒を出す。腰差として両惣代に三〇疋ずつ、新・本両座へ六百元を遣わす。客殿の下座へ屏風を立てて手伝いの衆と対面する「御目見へ」という儀礼を行う。この時、田楽法師は広縁より客殿へ上げない。対面の際は盃事がある。御幣衆へも酒を進上する。御幣紙を繕る。染紙を経師へ遣わす。

11月3日頃 経師が御幣の残りの染紙を受け取りに来る。

11月3・4日頃 日出山対馬守が小切を持参し、悦酒を出す。汲方より小切持参の時は意趣書を添える。頭屋からも例年の通り意趣書を出す。

11月吉日 大般若経転読の祈祷がある。経は別会の五師に申し入れ、唐院（興福寺関係の共用使用物を納める公物庫）で借用する。祈祷の前日、頭屋では奥の間に十六善神を飾り、洗米と神酒を供えて灯明をあげる。それ以前に木札を新調し、祈祷に関する一山廻章を認めておく。服者や新入は別廻章で知らせる。唐院奉行が祈祷に来た時は、日中に飯振舞いをすることを廻章で通達する。頭屋の稚児にも使者を遣わす。祈祷の表向きの客は一山・頭屋児・唐院奉行である。当日の祈祷導師は棟梁の役、咒願は還頭、散華は頭屋の役である。早朝、木屋を石取りに遣わし、中

門に調えられた大工と木挽の手水桶に石を入れる。同じく早朝、市（巫女）が祓いに来る。祓いの礼として白紙、白米を台にのせて遣わす。これを中門の手水桶に差し置く。使者一人を大工二人、木挽一人（この三人は春日座に属しているものに限り）に対して遣わし、別火のために用意する道具を通知する。大工・木挽への渡し物の一覧。春日座大工への下行米は片座で一石、両座で二石、木挽の下行米は三斗である。当日の表方の献立は式三献、初献と二献の間に、神酒と洗米を差し出す。その順は棟梁・還頭・頭人、上から下の順である。当日の料理方を板元と惣奉行に申しつける。ほかに板元を一人雇い入れ、釜屋と屋根一人ずつが手伝いに来る。折棒が済んだ昼後、釜屋が門の大注連、御幣の長注連、惣奉行へ遣わす小注連の三種の注連を作る。事前に紙を三束用意し、日雇いを一人釜屋へ遣わす。一山方と公物方の道具を借用師より借り入れる件については、頭人が別会五師に申し入れる。御幣串の塗足は頭屋出入りの塗屋へ申しつける。

11月7・8日頃 御幣串を塗りに来る。蔵に塗師鉢大小四つを貸して依頼する。御幣串は二六日の祭礼当日、田楽両座へ献入する。

11月中旬 楽頭（田楽頭の代理）が定まると、頭屋より別会五師へ田楽交名を待羽織袴の装束で持参する。衆中に相談して、学侶会合の件を、衆中・沙汰衆・供目代へは別廻章、法用僧へは内廻章で通知する。一臈法印より未新入まで、五〇〇六〇人を招いて饗宴を行う。承仕・唐院・新坊の奉行の四人を廻章をもって招いて振舞う。頭屋方からは御幣掛絹・山上詣費用・白五條・御児長絹紐・晒布・御児足袋・トンボウ・大申柿・ムカゴザシを、惣奉行からは大盛菓子・中盛菓子・盛菓子小折・盛菓子足無・亀笠・積交・鳳型并桔梗型・香入・盃台・チキリ・木色・ツラノ笠・楽器彩色・御幣傘・金入簪・田楽扇子・田楽傘・御児末広・饅頭・蜜柑・積交・キヌカツギを用意する。大折饅頭・蜜柑・積交・キヌカツギの盛り方が記される。

11月17・18日頃 借り物師が参り、祭礼道具を借用する。御師と神人と呼びに遣わし、二六日の御児出迎えの儀を間違えないように申しつける。例年、坂木治郎太夫のところの秘仏を借用しているので依頼する。二四日早朝の絃捻りのため、三、四人ほどの人員を確保する。

11月17日 衆中より仕丁を使者として頭屋に書状を遣わす。使者に酒肴を出して迎え、腰差として青銅を遣わし、衆中へ返書を託す。稚児の供の件を七人八人の仕丁に依頼する。

11月19日 明日より「精進入」なので頭屋へ行って手伝う。

11月20日 近年は一山方三読師・跡学・役僧・頭屋役人・法縁のみが「精進入」を勤める。頭屋の兄二人や唐院奉行は前掲の折棒の通りに振舞う。稚児へも使者を遣わす。注連を大門・惣奉行へ遣わす前日に作る。一山方の座敷は客殿の中程より仕切り、次の間と区別する。表方の献立。二の汁は肴部屋の肴師より出す。夕飯後、「服者<sup>は</sup>と孕まし男は明日より頭屋へ出入り禁止」を末々の者にまで惣奉行に傳達させる。

11月21日 早朝、市（巫女）が祓に来る。今日から二七日まで毎日来る。市に願米を与える。市の祓後、内一文字、外一文字どちらかを頭屋が決め、大門に注連を張る。坂木治郎太夫に廻章を出す。二六日に奉行が仮屋を所持する旨、代官より唐院奉行と新坊承仕へ手紙で依頼する。釜屋がアメシマキを作る。屋根屋が献部屋を作りに来る。

11月22日 御幣傘・田楽笠・島台等を広縁に飾ることを奉行が下知する。台に関しては、奉行が法縁の内の人に事前に頼んでおく。

11月23日 早朝より諸役人全員が頭屋に詰める。

11月25日 「装束包み」と「馬場還」の件についての廻章を唐院が出し、役僧が一山・御児に傳達する。この日から法縁中詰衆は頭屋に詰める。次の間に銭箱・音信帳・杉原紙一帖・硯箱等を事前に調べて出しておく。昼後早々、頭屋へ参り御幣部屋を調べておく。依頼しておいた御幣部屋衆は出仕する。田楽両座と惣代両人は番届けに来る。対屋において

悦酒を差し出す。惣奉行が挨拶し、田楽惣代は交名を明日持参すること  
を惣奉行へ申し渡す。経師が染紙を持参し、対屋において惣奉行が受け  
取る。三種の酒肴を出す。御幣部屋を調べたら、別火師に申し付けて  
「シタタメ」等を済ませ、御幣部屋の火の用心等を申し付ける。

11月25日 夜 頭屋より御幣衆を迎えに来る。頭屋へ参り、「別火シタ  
タメ」等を済ませた御幣部屋で御幣を裁ち始める。同夜、丑刻より荒神供  
を勤める。二四・二六日の三日間、従僧が荒神供を勤める。御幣裁ちが  
始まると、役井門の作事に取りかかる旨を惣奉行が指示する。

11月24日 早朝、「心見（試み）の赤飯」をへぎの足打折敷にのせ、市  
が懺悔をし、惣奉行が御幣部屋へ持参する。早朝、経師が箔置きに来、  
別火にて「シタタメ」等をする。本日より西大寺の愛染明王の開帳があ  
るので、二六・二八日間は捧物として青銅三〇正を送る。早朝、経師方  
より絃捻り三、四人が来、奉行飯屋で絃を捻る。頭人が一山院方へ、二  
六・二七日の出仕を依頼しに行く。頭人が直接、警固の件を奉行所へ依  
頼しに行く。大玄関より入り、使者間で取次ぎを介して、二六日の祭祀  
の田楽頭役勤仕のため、警固の役人を卯の刻に差し出してくれるよう、  
口上で奉行に申し入れる。午後二時頃、新・本両田楽座の惣代が交名を  
持参する。対屋にて悦酒を出し、惣奉行が挨拶してもてなす。昼後、御  
飯を出す。明朝の春日大宮・若宮両社への進物のため、御飯を中門に出  
しておく。御飯を出す時は職中が一人でも立ち合わなくてはならない。  
その時、還頭・頭坊が客殿に出仕する。御飯を出すとき惣奉行は幣を持  
って先へ出、中門で幣を御飯に差し置く。終わると献方より広縁へ、献  
の次第書付と諸役人の書付帳を出す。職中・還頭・頭人、他の詰衆全員  
で客殿において夕飯をとる。前夜と同様、御幣衆を頭屋より迎えに行き、  
御幣部屋の儀礼を行う。

11月25日 早朝、大宮・若宮へ御飯・酒・蜜柑・大串柿を供える。大宮  
方へは三方神人へ、若宮方へは拝殿惣ノ市巫女への書状を付ける。書状

は升に挟んで献方が持参する。大乗院・一条院両門主へ、杉重入料理・  
盃台・亀笠小折・大盛菓子・樽を献上する。奈良町奉行所へは杉重入料  
理・盃台・積交・盛菓子中折・指樽を献上する。院家方へは重箱入料  
理・菓子・錫を献上する。一山一臈法印のみは出仕する。楽頭は幣を持  
参する。二五・二七日まで観音堂の鐘を撞く。惣奉行へ酒・切素麵・赤  
飯・菓子を送る。両門主より頭坊へ使者が下つて一献があり、挨拶は結  
衆の内である。院家からも使者が来、三種でもてなす。挨拶は奏者に申  
し付ける。御幣が出来たら安置する。客殿・妻戸口の両方へ御幣紙で御  
簾を括り上げる紐を付けておく。今日入用の物、稚児方の入用物、白布  
の事、惣奉行へ渡す物、客殿の懸物の事、中門の飾り事が記される。

田楽両座が来ると、惣奉行へ交寸日記を渡す。田楽法師四、五人が客  
殿で田楽装束を拝見し、お祝いを述べて装束を包んで対屋へ戻る（装束  
裏）。装束を長持にしまつて、対屋で一献があり、役井門より退出する。  
午の貝で頭坊へ一山寺僧が出仕する。扨僧が催促役となる。献の時、表  
方加行以上の者は客殿へ、白衣の衆は対屋へ着く。一山が揃うと献を出  
す。扨僧二人が客殿下座の広縁で給仕する。献立方は惣奉行へ下知する。  
献の儀では目上より次第に挨拶する。客殿の一献が終わった頃、対屋の  
初献を出す。例年、本日は六方の集会なので、午時にかかると次の間を  
宴席とする。三献終わると、全員客殿で飯に移る。終わると、中門で皆  
に礼物を渡し、奏者に持つていかせる。暮頃、田楽新・本両座に米を渡  
す。頭坊玄関で、惣奉行・頭屋・代官立ち会いのもと計り、田楽両座惣  
代が請け取りに来る。

11月26日 朝七ツ頃、扨僧は頭屋へ参勤し奥の間に燭台・火鉢・煙草盆  
を用意する。稚児がやつてくると、扨僧は役井門より入れ、乗物にのせ、  
手を取って客殿上座より奥の間へ通す。別火で沸かした茶を進上する。  
惣奉行へ申し付け、供の者に支度させる。菓子部屋へ申し付け、稚児に  
菓子を進上する。稚児に足袋・長絹・末広・入簪を渡す。六ツ時以前

に稚児の装束をつける。扨僧も装束をつける。雨天ならば中門で田楽能が演じられる。白衣衆中は広縁にて南向きに出仕する。六ツ時頃、奉行所から警固の衆が頭坊に来る。広庭飾りの図。広庭飾りは惣奉行の手配である。六ツ時寺僧衆が出仕する。扨僧は客殿の下座に居る。用事がある時は仕丁を呼んで言いつける。衆徒が出仕する以前には仕丁が役井門の外に立ち並ぶ。衆徒が出仕する以前、惣奉行より田楽へ挨拶をする。早朝、田楽より献を請け取りに来る。赤飯・雑煮を漆鉢に入れ、酒を瓶子に入れ、彼の方より桶を持参したなら、切炭・酒・赤飯を献方より渡す。五師・還頭役が客殿へ出仕するのを見て、衆徒は対屋へ出仕する。中門白衣の衆も対屋へ出仕する。衆徒が中門へ出仕したら稚児を出す。一人の扨僧が客殿より屏風を開けて稚児を出す。扨僧一人は奥の間に居て、小さい稚児が先に出ないようにする。稚児の手を引いて出、烏帽子を直し、屏風をしまい、扨僧二人は客殿の下に着座する。稚児が出た後、田楽法師が出仕するように扨僧が指示する。田楽両座は、本座を前、新座を後に役井門より「打入」を行い、床木に腰掛ける。両座の田楽法師上三人ほどが「庭の献」の配膳をし、三献の儀を行う。惣奉行は役井門に立っている。「庭の献」が終わると、「装束給」の儀に移る。終わると田楽法師が立ち合い祝言があり、客殿の御簾を下げ、献の儀がある。稚児の献に扨僧が付く。奉行飯屋・同心・警固・供者にも昼飯・酒肴を出す。宝生座の猿衆六人が来、三献で饗応する。退出の折には褒美の脇差として五〇疋を惣奉行から遣わす。一献が済むと、中門へ御簾を上げて笛を吹き、頭屋能を始める。猿衆へ能番組を要求し、これを強杉原紙に認め、客殿・対屋・奉行飯屋へ届ける。盃台を二台出す。客殿の御簾が上ると、客殿・中門方・対屋にそれぞれ菓子を出す。能二番・狂言が終わると、二人の稚児を妻戸に出す。稚児の長絹を田楽が取って、中門へ饅頭を放らせる。人形三ツ膳と召出しを出す。田楽法師へ花（鬼杉原紙を三つに折って百疋と書く）を遣わす。田楽両座の一・二膳を

呼び出し、五師と盃事があり、謡が二・三番ある。本来、能五番・狂言三番であるが、近年は能一番・狂言二番である。能狂言が終わり、中門よりの饅頭放りが済むと召出しに移る。田楽両座の盃事が終わって退出すると、祝言が始まる。稚児を奥の間で休息させる。大折・盃台等を片付ける。客殿妻戸口の大御簾を手繰り上げる。田楽両座が進むと稚児が出る。還頭と頭人兩人が妻戸口前へ出仕して手水をつかう。田楽法師も手水をつかい、終わると小姓が御幣を出し田楽法師に渡す。田楽は祝詞・「打入」を行い退出する。続いて衆徒・警固も退出する。客殿の御簾を下げさせる。稚児に装束を付けさせ、客殿に出す。五師衆や年寄衆が来るからである。春日大宮では正面の掛木に稚児が立ち奉幣のみ、若宮では御殿の前に立ち神楽奉納と奉幣がある。夜になると、高張り箱提灯を持たせて宵宮詣でをする。終わると、頭屋の役井門から帰り、客殿の妻戸口より上り、装束を脱がせ、乗物を客殿の縁まで引き上げさせ、稚児を乗せて帰す。扨僧は明日の稚児の船と包裹頭を作る。惣奉行宅へ酒と赤飯を届ける。御幣の前に行灯を灯し、火の用心を別火師に申し付ける。

11月27日 朝六ツ過ぎに扨僧・棟梁は頭屋へ出仕する。稚児も出仕し、昨日の装束を付ける。仕丁が出仕すると一献を出させる。馬長の稚児を出す。田楽法師が役井門から対屋へ通る。本座は中門、新座は対屋へ着く。惣奉行が挨拶して二献を出し、田楽は宿坊へひきとる。その間に棟梁・還頭・頭人が幣を出して行水する。田楽が再び出仕し、近所の五師への出仕を依頼する。寺僧衆が出仕したら御幣を出す。還頭と頭人は客殿に出仕し、田楽法師が進むと稚児を出す。稚児が客殿に出仕すると御幣を出し、田楽法師へ渡す。田楽は御幣を妻戸口真中へ置き、祝詞と「打入」を行う。田楽が御幣を請け取り退出すると、大門の注連を外し、服忌を解く。寺僧衆が揃うと一献。今日六方衆は祭礼の「下の渡り」に参加する。客殿の御簾を上げ、広縁に盃台と打鉾子を飾る。「下の渡り」

を見せるため稚児の供廻りの準備をさせる。惣奉行宅へ酒・赤飯を届ける。「下の渡り」が済むまでの間、稚児をあやすため大折の蜜柑を与える。門木の足打に赤飯を入れて、懺悔をして客殿の妻戸口へ出し置く。楽頭・幣持ちは東金堂へ出仕する。「下の渡り」が始まると稚児に装束を付けさせる。終わると、稚児の供の仕丁が来るので一献がある。稚児が「松の下の儀」の間ぐずらないように、氷砂糖・蜜柑を用意しておく。一献が終わると、稚児の一行は御旅所の東の飯屋に向かう。行列を組み影向の松の下へ赴く。寺僧衆の座の西へ稚児の座として床木を置き、扨僧がその両側に付く。松の下上段の真中より西は衆中、東は一山の寺僧が立つ。上段の前の床木に稚児を掛けさせ、扨僧が両側に立つ。「松の下の儀」が終わると、行列を組み直し馬場を通り還る。客殿で祭礼役人全員に夕食・酒を出す。六方中は引き続き流鏑馬に出仕するので先に次の間で夕食を出す。板元（食事係）も酒宴に移る。

11月28日 朝五ツ時に頭屋へ行き後片付けをし、役人への祝儀物の用意をする。稚児・棟梁・御幣部屋衆中・交名・扨僧・御幣出し・台奉行・田楽宿坊への祝儀物の一覽。秘仏の礼として金百疋を御師に託す。晴れていたなら、後日能の口切としての酒と下行米を惣奉行へ遣わす。御旅所へ小休幕所を設ける。能が終わると、田楽法師の「庭の献」の儀がある。11月29日 竹葉一荷を持参して両門跡に挨拶する。別火師・肴師・素麺方・飯方・釜屋・惣奉行・別火師の手伝いへの返却品一覽。米・酒の覚。頭屋人数割。諸下行米の覚。諸書物の覚。

本稿を草するに際し、幡鎌一弘・岡本彰夫・大宮守友・山本光正氏に御教授いただいた。末筆ながら心より感謝する次第である。

（国立歴史民俗博物館民俗研究部）

註

- (1) 「祭礼文化史の研究」法政大学出版局 一九九五年
- (2) 千鳥家文書。「神道大系」春日（永島福太郎氏校注 一九八五年）所収
- (3) 「田楽史の研究」稿本一九五〇年 吉川弘文館 一九八六年
- (4) 「奈良田楽頭役考」「国史学」六七 一九五六年。「奈良田楽座について」附、装束給のこと」「天理大学学報」四七 一九六六年
- (5) 「大乗院寺社雑事記」ある門閥貴族の没落の記録」そして 一九八三年
- (6) 「中世における扶助的贈与と収取」トブラヒ（訪）をめぐって」「歴史学研究」六三六 一九九二年
- (7) 「祭礼をめぐる負担と贈与」「歴史学研究」六五二 一九九三年
- (8) 「田楽放」「能楽源流考」岩波書店 一九三八年
- (9) 芸能史研究会編 三一書房 一九七四年
- (10) 安田氏 註(7)
- (11) 前掲「田楽史の研究」
- (12) 「天理図書館所蔵『大宿所日帳』」「ビブリア」一〇五 一九九六年。「江戸時代の春日若宮御祭と願主人」（奈良民俗談話会発表資料） 一九九六年
- (13) 林屋辰三郎氏「中世芸能史の研究」岩波書店 一九六〇年
- (14) 近江氏 註(4)
- (15) 鹿谷勲氏「大和東山中の祭りと芸能」田楽芸を中心とした事例と考察」『民俗文化分布圖論』名著出版 一九九三年
- (16) 近江氏 註(4)
- (17) 安田氏 註(7)
- (18) 近江氏 註(4)
- (19) 同右
- (20) 伊藤氏 註(3)
- (21) 同右
- (22) 同右
- (23) この部分は幡鎌一弘氏の御教示による。出典は奈良県立図書館蔵「奈良行政文書明七/A/一八一二」等である。

# 凡例

- 一、漢字は原則として常用(通用)漢字を用いた。
- 一、変体仮名は原則として平仮名に改めたが、与(と)・ム(より)・者(は)・而(て)・江(え)等はそのまに残している。
- 一、適宜句読点を施した。
- 一、史料中の誤字やくずし字に朱丸が記され、右横に本史料の記主以外の者の筆跡で訂正文字や読解文字が朱丸の中に記されている例がある。その場合、訂正・読解文字のみを記した。朱丸の註記は原則的に省略した。
- 一、文中( )はすべて福原の註である。
- 一、奈良県立図書館印は省略した。
- 一、図版の方向は見やすいように適宜変更した。

## 観音院

### 頭屋棟梁日記

栄憲

(表紙)

天保十一子年十一月

一、素袴拾具

右者慈昭院再返頭役之節以会合料新

調

9月 一、九月頃頭屋頭坊ム棟梁御頼有之、致

承知候ハ、勝手次第ニ御幣手伝之衆頼

置也、尤御幣部屋之衆ハ五人頼置也

乍併近年者四人相頼ミ棟梁共五人ニ而

仕舞也、何レニ而モ不苦事

9月 一、同月吉日相勘ヘ祈禱仁王経執行有之

事誠ニ是ハ内證之祈禱頭屋役人并

御縁斗リ、是ハ近年随意略之

10月亥日

一、十月亥ノ子沙汰之、亥日三ツ有之時ハ中ノ  
亥日、式ツノ時ハ初ノ亥也、例年天ノ川弁  
才天江代参奉納物等有之、尤頭屋人参  
詣致ス共不苦、乍併近年ハ何レモ皆マ  
代参也

奉納物覚

一、銀八匁 御開帳料

一、同八匁 御湯料

一、同拾式匁 御百味供物料

一、青銅式十疋 御神楽料

一、米壹斗式升 福桶二ツ料

一、同五升 供造作料

一、同壹斗 造作料

一、式斗七升各分相渡事

一、同五升

但シ此五升ハ為祝儀遣ス由、是ハ頭人

存寄次第也

右之通持参、尤米者各分例年御札相

納ニ参ル節、初尾ト一所ニ相渡ス、銀包斗

持参スル事

御師ガ当方ヘ被献物覚

一、御百味供物 壹箱

一、福桶 式ツ

一、御札 壹枚

一、湯笹 二本

右之通例年請取事

一、亥子重送り方御同学五師役者中、頭屋役人御縁頭屋ノ兎并惣奉行其外出入方頭人心次第被相送事

10月末 一、十月末頃ニ頼ノ衆二度も三度も振舞可

申事近年ハ略之、乍併頭人心次第也

10月下旬 一、同月下旬之頃ニ頭坊ヨリ例年ノ祈禱

転読大般若經被致執行度旨相

談有之事

10月 一、同月田楽笛之笠之儀、御頼申上ル事

但一門様御門宗ナラハ一門様へ、大門様御

門宗ナラハ大門様へ、内々御同学ヲ以御頼

申上ル事、御聞濟之上例之通竹葉沓

荷献上也、尤料物ナラハ青銅二十疋頭人直

参御礼被申上ル事

10月 一、同月勝手ニ日出山対馬守へ例年之通物タ

チ二本小刀式本奉納有之様申遣ス、奉

畏候旨返答也、尤申遣ス事下部ニ而モ口

上ニ而申遣シ置也、尤近年ハ小刀四本奉

納可致様申遣ス事

11月1日 一、十一月朔日田楽初入ニ付両座惣代兩人

楽器等持参ス、請取直様中門へ直ニ

置事

一、田楽兩人対屋ニ而例之通り多葉粉<sup>(煙草)</sup>

盆・悦酒等出ス、尤多葉粉盆ハ無足也

一、吸物

但大三角切豆腐式ツ切五分土器ニモ<sup>盛</sup>

リ九寸片木ニノセ出ス  
酒 塗<sup>(鉄子)</sup>テヤウシ  
肴 三種見合

右之通出ス惣奉行挨拶ニモテナス、下部モ玄関ニテ酒出ス也

一、田楽悦酒相済腰指トシテ三十疋宛

新本両座へ、以上六百文遣ス也

一、例之通御目見へト申相頼之、対面致遣

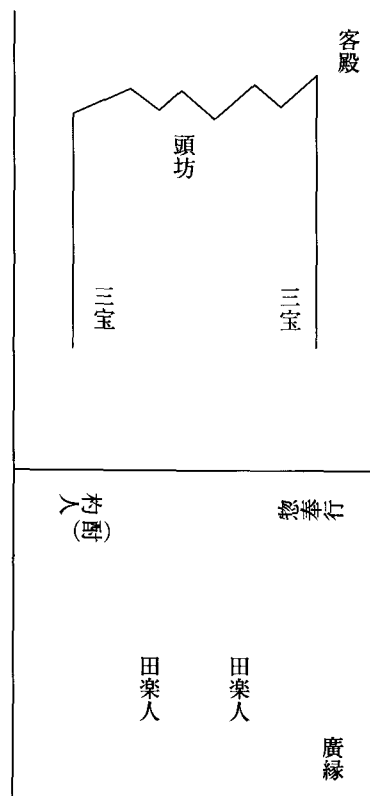
ス也、左モ無ハ其俣ニ捨置事也、相頼者

客殿之下座へ屏風ヲ敷対面スル也、尤

下座程宜シ、田楽広縁ハ客殿へ上ケヌ様

ニ致ス事也、旧席不可事

一、対面之節例之通盃有之事



献立

三寶 盃五分土器三枚乗セ出ス

松竹梅 氷豆腐 椎茸

三寶 見柑

人 参

焼湯葉

酒塗 チヤウシ

一、今日悦ニ御出之衆中江も三角切吸モ  
の三種ニ而酒出ス也、尤夕飯モ差出ス  
也、此外馳走者頭人之心次第也

一、勝手ニ御幣紙ヨリ置事<sup>(巻)</sup>

一、御幣紙 壹束

但し紙数六百枚也

一、白妙ニタイ分 百廿枚

但し片座之時ハ六拾枚也

一、金剛ニタイ分 百廿枚

但同断

一、御幣紙上中下之段ニヨリ置事

一、上百五拾枚斗、但し是ハ白タエ之用

一、中百枚斗、但しカウ立梅ハチ其外之用<sup>(鉢)</sup>

一、下百廿枚斗、但染紙兩座分

右之通ヨリ置事

一、御幣紙 百貳拾枚

但し片座ニ付六十枚宛ニタク、リシテ置ス<sup>(鉢)</sup>  
也、内片座分五十七枚ツ、帰ル

一、外ニ二通り分 八枚

但し是ハ棟梁之頼也、依而式通りキハマリ<sup>(巻)</sup>  
タル事ニハ非ス頼次第也、乍併ニ通分ニテ  
ヨシ

張紙書入

一、染紙百廿枚之處無量寿院節ハ片座

ニ付拾枚宛増し相頼故聞届遣ス、尤十

枚宛ニク、リニシテ遣ス故上廿枚也

右之通経師江相渡ス事

コノ間貼紙

一、式通分 廿枚

是ハ随分近年相頼遣ス

外ニ

一、拾貳枚

是ハ棟梁も頼之分相渡ス

ノ数百五拾貳枚相渡ス

一、金ノ丸

此間一寸四分

11月3日 一、同月三日頃ニ経師御幣紙染紙請取ニ参ル

其節青物壹台差出御念入候趣挨

撈致対屋江通例之通悦酒差出ス

献 立

吸もの 三角切豆腐

肴 三種見合

右之通差出ス、挨拶等惣奉行江代官ハ  
可致事、悦酒相済御幣紙染紙前書  
之通相渡也、経師西之坊

平岡清左衛門両宛也、依而拾年替リ請

取ニ可参也

11月3日 一、同月三日・四日頃日出山対馬守小切持参致

ス、例之通悦酒差出ス、献立経師江差

出スト同様也、尤汲方ハ小切持参之節意

11月

趣書添差出事、右ニ付頭坊ノモ例年  
之通意趣書差出ス、案文両様共奥ニ  
記ス

一、当月吉日次第祈禱転読大般若經執  
行有之事

一、祈禱之前日頭屋へ参り明日之奥ノ間  
(奥)カサリ様其外得而校合シテ手伝可申  
事

一、前日ニ奥ノ間ニテ十六善神カサリ置也、尤  
供物洗米神酒燈明也、洗米神酒者五分  
土器ニテ片木ノ足打ニテ乗セ上ル事  
一、木札新調前辺ニ申付置事、尤認様ハ  
奥ニ記ス

一、大般若經ハ別会へ申入唐院ニ而借用  
一、一山廻章前辺ニ認置事

但し服者ハ別廻章とし会執行有之  
時ハ新入未番迄ハ内證ニ而別廻章也、廻章  
案文奥ニ記ス

一、唐院奉行例年祈禱之節、日中飯振舞  
申事例年廻章ヲ以振事、廻章案文奥  
ニ記ス

一、頭屋之児江も使を以申進ス事

一、表向ノ客者一山并頭屋児唐院奉行也、其  
外内容頭人心次第

一、当日祈禱導師棟梁之役也、咒願ハ還  
頭・散花ハ頭坊ノ役也、尤祈禱始ト中門御  
幣串作ニ始ト同様也、祈禱発願初候節

ニ中門始メ可申由下知可致事  
中門調物

一、御幣串 式四寸二本  
但吉野フシナシ能々吟味可致事  
壹本ハ替木也、但シ荒ゴモニ卷置也

一、カキ板  
但寸法長サ三尺二寸、幅壹尺式寸ニ

テモ三寸ニテモ、厚サ壹寸六フ或ハ式寸、尤二枚  
ハ新調二枚ハ古物ヲシラゲ用ル也

一、穴木 四本  
但寸法長サ三尺二寸、幅二寸五歩厚サ壹寸

一、粘版板 式枚  
但長サ壹尺八寸或ハ式尺、幅四寸五分或ハ五寸  
或ハ五寸、厚サ壹寸也

一、物サシ 四本

但是ハ呉服尺也、幅五歩、厚サ三フ余  
一、竹ノヘラ 拾本斗

一、挟竹 五拾本斗  
一、御幣ホイロ 壹ツ

一、御幣傘柄 式本  
一、児床木 二脚

一、足駄 二足  
但寸法長サ八寸式分、前ノヒロミ三寸六分、ア

トノヒロミ三寸三寸二分、ハノヒロミ五寸三分、惣高  
サ四寸八分、但カケ分黒ヌリ也

一、高足横カミ 四本  
一、太鼓ノバチ 二十本

一、御幣小刀柄 四本

此外樂器損シ之節何ニ不依致繕事

大工両座御幣方下行之内ニ而可致事

一、早朝木屋へ石取ニ遣ス事

一、是ハ中門大工木挽之手水桶ニ入レ置事

一、早朝市祓ニ来ル、尤前日ニ申遣シ置也

尤祓之節半紙壹帖白米壹升台ニノセ

遣ス也

是モ中門手水桶へサシ置事

一、下部壺人大工・木挽方小遣ニ付置事

渡シ物覚

一、手桶 壹ツ

一、土<sup>(瓶)</sup>ヒン 壹ツ

一、スヤキフロ 壹ツ

一、スヤキ火鉢 貳ツ

右別火也

渡シ切道具ノ覚

一、荒コモ 壹枚

一、薄縁 壹枚

一、筵 壹枚

一、洪碗 壹具

但シ三ツ碗也

一、木皿 一

一、板打敷 一

一、茶碗 一

一、キセル 壹本

一、多葉粉<sup>(通替)</sup> 壹両

右之通大工兩人・木挽壺人江渡シ切也

一、大工・木挽春日座外不可事

但片座下行米壺石両座分二石也、木挽

下行米三斗也

一、当日表方献立ノ事

献立

大根

人参

あへませ

椎茸

汁 若チサ  
此葉とうふ

くり

生か

青身

白あへ

飯

チヤツ

こう茸  
ゆりね

香もの

上ケ<sup>(湯寒)</sup>ゆは

春寒

長いも

松茸

ふ<sup>(麩)</sup>

草たけ

小鳥

茶碗むし皮牛房

くり

ゆりね

中酒

青みセリ  
塗<sup>(餅子)</sup>チヤウシ

肴三種 湯葉  
くわゐ 人參

但シ重箱ニテ片ノ足打乗セル

式献目

吸もの

神酒并洗米

三献目

平汐

まんちう

引菓子みかん

こんふ

一、中酒初献相済二献目ノ間ニ神酒洗米

差出ス、右者棟梁・還頭・頭人、夫方上ノ次第

ニ末迄イタ、リ、尤服者不可事

一、今日料理方板元惣奉行ニ申付也、尤外

ニ板先壺人雇置事

一、釜屋壺人、屋根壺人手伝ニ参ル也

一、祈祷相済昼後釜屋シメ拵ル也、尤モ門

ノ大シメ・御幣ノ長シメ也、惣奉行へ遣ス小シ

メ共以上三ツ拵ル也、わら三東前辺ニ用意致

シ置事、尤手伝ニ日雇方一人釜屋方へ遣

ス事

一、一山方道具借用之儀、追而借用師方御頼

可申上候間借用被仰付ル様、障ルニ頭人頼ニ

可参ル事

一、公物方借用物同断別会伍師へ兼而頼

置事也、借用状案文奥ニ記ス

公物方借用物覚

一、金屏風 壺通

一、大台子 九脚

一、式間床 三脚

一、壺間床 二本

一、役井門柱 二ツ

一、番所 壺ツ

一、水留大桶 壺ツ

右外馬長方委細ハ奥ニ記ス也、何ニても入

用物借り状ニ而借用之事

一、御幣串塗足ハ頭坊出入之塗屋へ申付ル

事、他へ出ぬる事不叶事

11月28日 一、同月七・八日頃方御幣串ヌリニ参ル、丈蔵ニ塗師

鉢大小四ツ借シ御依頼置、右者廿六日田楽両座

へ献入シ遣ス入物ノ用也、尤塗師屋へ渡物ノ覚

一、薙 拾枚

一、小竹 拾本

一、ふきん 二

一、スヤキ火鉢 壺

一、マナ板 二

一、半紙 式帖

右之通相渡ス也

11月中旬 一、同月中旬ニ楽頭定ルト交合名ヲ別会五

師へ頭屋方侍羽織袴ニ而為持遣ス事無

失念様可聞付事、書様者奥ニ記ス

一、同中旬ニ吉日次第内ニ職中○ナトへ沙汰ノ衆供目

○ナトへ相談ノ字侶会合可有沙汰職中

代ハ別廻章、法用僧ハ別廻章ヘハ不叶、内衆

廻章一臈法印ヨリ末新人迄呼、頭人分別次

第五十人モ六十人モ呼、饗食ナトモ入、自然頭人

トラサレハ内ノ廻章ノ口ニ自然御音信堅被下

間敷候ト可書、職中別廻章ノ方ニハ不書

臈分ハ出仕不叶、承仕唐院新坊ノ奉行四

人廻章ニ而振舞、寺僧同前ニモテナス、扱振

舞ハ二ノ膳・三ノ膳・四膳マテ沙汰ス、イカホト其膳

掛ス、芸能モ有之、何レモ頭人次第頭屋ニヨル、

定事ニハアラス、サレトモ中段後段ハ有無

ニ有之事

右之通会合其沙汰在之候得共近年ハ

略之、依会合料トシテ金五両公物唐

院ヘ差出ス事、乍併為覚悟廻章等奥ニ

記ス

頭屋方用意物覚

一、御幣掛絹 二巻

此代

一、山上詣 三疋

此代

一、白五條 三條

此代

但内二條者御兒クワトウ方

老條ハ当人ノ用

一、御兒長絹紐 二掛

此代

一、晒布 四疋

但し六丈物ナラハ三疋也

一、御兒足袋 二足

但赤紐

此外馬長用意物奥ニ記ス

一、トンボウ 二百本斗

但シ重銀二朱也、金百本・銀百本凡二百本斗

也、上ハ紙金下赤紙二枚也、幅三分三ツ折九分

長サ二寸五分也

如左



一、大串柿 五抱

右者前辺柿ノ有時分ニ申付置也、尤寸

方ハ奥ニ印シ有之

一、ムカコザシ 百本斗

右ハ豆腐ヲ二分四方程ノキリコニ切テ竹ノ串

ニサシ置也、前辺六月時分ニ拵置事

惣奉行ハ調進物覚

一、大盛菓子 二答

但足二重くり右ハ両門様献上也

一、中盛菓子 壹答

但奉行所江相送り

一、盛菓子小折 時之人数

但足折一山方

一、同足ナシ 廿六答

但田楽方

一、亀笠 時之人数

右ハ両門様献上并一山方尤頭屋以上斗也

尤盛立高サ五服ニ而二尺壹寸也

一、積交 時之人數

右奉行所并一山頭屋以下之衆斗也

盛立高サ六服ニ而壹尺五寸也

一、鳳形并桔梗形

右ハ惣奉行ハ吉野紙前辺ニ受取

乗ル、但吉野紙三帖相渡也

請取物渡覚

一、香入 式百五十斗

右者西屋清治郎へ申付、是ハ清治郎キ

ハマリタルニハアラス、勝手知リタル故申付也

但下行米白米壹斗六升遣ス事

一、盃台

右者兩門様并頭屋ノ見兩人・一山一膳法

印・読師中ハ五ツ人形也、其外奉行所

并一山方三ツ人形也、時之人數通申付ル也

一、チキリ (千切) 式膳

但代三十目之請取也

一、木色 式膳

右ハ廿六日中門対屋出ス用也

一、ツラノ笠

但シ代三十匁ノ請取也

一、楽器サイシキ (彩色)

但下行米

一、御幣傘 二本

一、金入簪 二筋

右ハ御見用代二匁

一、田楽扇子 三十本

内二本ハ金ノ丸、二本ハ銀ノ丸、金ノ丸ハ地赤、銀

ノ丸ハ地此色也、残二十六本ハ地白ニ松竹梅

ニ鶴亀也、モヨウ也、右田楽兩座分

一、田楽傘 三拾本

代六十匁也

一、御見末広 二本

大折之覚

一、饅頭 四答

一、蜜柑壹色 二答

一、積交 二答

一、キヌカツキ

大折饅頭盛様之事

饅頭中巻わら四方江五分ヲ置、土ヲ入其

上江すりぬるを入テ、四方ハ笠紙ニ而包、但シ

壹合ニまんちう式拾五宛、下ニ五分土器敷、申

ニ而留ル、まんちう壹ツ付二分宛ニ申付ル

同蜜柑盛様之事

四方立ノ竹串ヲ立、是ニウガン拾式さし、亦蜜

柑ヲ六ツ宛串ニサシ、尤中江杉葉コマカニ

切入テ糸ニテシメル、積仕舞テ蜜柑ノ葉ヲ

サシコム、商立御幣部屋ニテ出来ル也

但壹合ニ付ウカン數三百八十九入ル也

積交盛様之事

下ハ蜜柑式通り三段横ニ六ツ並ヒ四方此

通り、但シキヌカツキ四通り二段様ニ七ツハツ大

小有之、四本蜜柑キヌカツキ右盛様ニ応ス

上ノ処ニテミカン十三芋大小七十種、尤ミカンノ処ハ蜜柑ノ葉ヲサス、申ノ所ハ杉葉ヲサス也但壺答ニ付蜜柑百八十六、芋凡三百五十八

ノ入ル也

キヌカツキ壺巴盛様之事

高サ横惣鉢ミカン一色ト同断也、四方ノ程ニ芋大

キナノヲ揃、十八・九程亦横ニ芋大小十計差込ツ、ミ

上ル、仕舞ニ杉葉指置也

右之通り前辺ニ児供仕丁盛ニ参ル事

乍併近年勝手次第請取也

11月17日 一、同月十七・八日頃ハ借り物師参リ道具借用之

事

一、同月十七・八日頃ハ御師神人呼ニ遣シ来ル、廿六日

御児出迎之儀無相違出迎候様申付ル、但亦

例年治郎太夫ニ而ヒブツ借用致候ニ付借用之

儀頼入ル也、并廿四日早朝絃ヒネリ三・四人斗可

参旨申付ル、尤ヒブツ借用致状左ニ記ス

覚

一、唐織 式

一、摺薄 式

一、腰明 式

右之通今度若宮祭礼田楽頭役之

儀、被致勤仕候ニ付借用被申度候間

此者ハ御渡可被下候以上

何院内

月日

何某

在判

坂木治郎太夫殿

右之通相認メ廿四・五日比ニ御師向故ニ遣ス也

11月17日 一、十七日衆中ハ書状来ル、頭屋指ハ頭坊出入

之仕丁ハ申付ル、尤持参之節吸物酒肴三種

ニ而出ス、相済腰指トシテ青銅式十疋遣之、尤

衆中江書状返書認置遣也、案文奥ニ

記ス

一、児供之儀仕丁頼ニ参ル、但シ、七・八人斗申付ル、頭

人心次第何人ニテモ不苦事

11月19日 一、十九日明日精進入ニ付頭屋ハ参リ何テ篤与

相調手伝申事

11月20日 一、廿日精進入ニ付近年者一山方之説師・跡学

役僧・頭屋・役人・法縁斗也、其外頭屋之児

兩人并唐院奉行祈禱之通振舞事

一、一山方廻章三口已前ニ出ス事、但シ是ハシシ

会服者有之共無ニ別廻請

一、御児江モ使ヲ以申遣ス事

一、唐院奉行方廻章奥ニ記ス

一、シメ大門并惣奉行江遣ス、前日拵置事

尤右ハ祈禱之日釜屋拵ルシメ也

一、当日昼後早々頭屋ハ参シメ拵置事、委

細ハ御幣記有之

一、今日一山方座敷ハ客殿中程ヨリシキリ次

ノ間ト壺所ニ致也、尤表方献立左ニ記

献立

チヤツ 正月 スマシ  
牛蒡 汁 こんぶ  
胡椒

平皿 上ケゆは  
山ノ芋  
シハ竹

引而

二ノ汁ねぶか 但シ茶碗ニモリ  
土器フタ配前ハ  
九寸片ニテカヨウ

茶碗 小鳥  
水菜

中酒 塗(銚子)てうし

肴三種 但重箱片木ノ  
足打ニ乗セル

引菓子 ミかん  
まんちう  
こんぶ

以上

一、二ノ汁者肴部屋肴師ハ出ス也

一、夕飯モ相済候而服者并ハラマシ男明日ハ出入無  
之様堅ク亭止可致旨末ミノ者共迄申渡  
ノ様惣奉行ヘ申付ル事

11月21日 一、廿一日早朝市祓ニ来ル、前日ニモ申遣シ置

事、尤今日ハ廿七日迄市毎日来ル、頼飯等出ス

一、市祓相済大門江シメ張事

但内一文字・外一文字両様ニ張也、是ハ頭人  
心次第

一、板本廻章出事、認メ様奥ニ記ス

一、唐院奉行并新坊承仕ハ廿六日奉行飯

リ屋所持之義、代官ハ以手紙頼遣ス事

一、釜屋アメシマキ拵ヘ参ル事

一、アメシマキ餅米白米式斗内別火方餅三升  
斗取り置也

一、屋根屋、献部屋拵ニ参ル事

11月22日 一、廿二日御幣傘田楽傘并嶋台等広縁ヘ

カサル事台奉行之下知也、尤モ台奉行法  
縁之内前辺ニ頼置事

11月23日 一、廿三日早朝ハ諸役人不残相詰ル事

11月25日 一、廿五日装束包并馬場還之廻章一山相

觸ル事、是レハ役僧之役也

一、御児江も使者を以申遣ス事

一、唐院奉行廻章出ス事

一、廿五日装束包廻章斗使を以相触也

一、今日ハ法縁中詰衆被相詰ル事、尤次之

間ヘ錢箱・音信帳并杉原宅帖・硯箱等前  
辺ニ調ヘ置出ス置事

一、昼後早マ頭屋江参リ御幣部屋調置事

尤頼置候御幣部屋之衆何モ御出也、御幣  
部屋調様委細御幣記ニ有之

一、田楽両座惣代兩人番届ニ参而例年之通対  
屋ニおゐて悦酒差出ス、尤惣奉行挨拶致

事、尤明日例之通交名持参可致旨惣奉行  
ヘ向ケ申渡也

一、経師染紙持参致ス対屋ヘ通シ惣奉行

出合請取、例之通り吸物三角切豆腐肴三  
種ニ而酒出ス也、其節ニ明日互刻ニ不被成様

早朝の御出可有之旨、惣奉行を以申入置事

片カハ五・クツマキ式枚・トンホ壹枚・チャキン壹枚  
都合五拾七枚

一、今日ニ持参ニ限リタル事ニアラス、例年廿三  
日迄ニ持参有之事、但し五拾七枚ツ、ニク、リ

外ニ抱

一、御幣部屋調候ハ、別火師申付、シタ、メ等相  
済御幣部屋火之用心等者勿論万事ニ

心付、尤今晚刻限之儀例刻後夜ニ何レ

モ案内可致旨堅ク別火師へ申付ル事

一、同夜詣、夜ニ頭屋へ迎來、頭屋へ参リ別火

シタ、メ等相済御幣部屋ニ入、御幣タチ

始ル事委細ハ御幣記ニ有之

一、同夜丑之刻ハ荒神供勤ル、尤廿四日・五日・六日

三日之間從僧之役也、前辺ニ從僧へ申付

置事

一、御幣部屋始ルト役井門ニ取掛リ申度

旨惣奉行ハ相窺事、差支等無之候勝

手ニ取掛リ可申旨申付ル、尤伺候スバ下

知可致事

11月24日 一、廿四日早朝心見ノ赤飯へキ足打ニノセ市ノ

懺悔ヲサシ、惣奉行御幣部屋へ持

参致事

一、早朝ニ經師薄置ニ参ル、別火ニテシタ、メ

等為致候事

經師へ渡シ物覺

一、金薄<sup>(箱)</sup> 五拾枚

兩座之時ハ片座廿五枚

一、銀箔 五拾枚

同断

一、筆 式対

同断

一、吉野紙 式帖

同断

右之通相渡ス、尤近年ハ重銀箔ハ不相  
渡、經師より持参依薄代拾六匁五分

惣奉行江向相渡ス事

一、例年今日西大寺愛染明王開帳之儀、唐

院主持坊へ向頼遣ス事、尤廿六日・七日・八日分

捧物トシテ青銅三拾疋書状ヲ添相送ル事

案文奥ニ記ス

一、早朝の御師方ハ弦ヒネリ三・四人斗來、尤奉

行飯屋ニ而絃拵事

一、一山院マ江明後廿六・七日兩日御出仕可被下

旨頭人頼ニ可参事

一、今日中ニ例之通奉行所江警固之儀

頼参ル事大玄関ハ上リ使者間へ通、取次

ヲ以申入、明後廿六日若宮祭礼田楽頭

役之儀ニ付、例年之通警固御差出し可

被下候旨口上ニ而申入、尤刻限相尋候ハ、卯

之刻と申置也、頭人直参可致事

一、昼後八ツ時頃、田楽新・本兩座惣交代

名持参中、例之通対屋ニて悦酒等出し

挨拶等惣奉行モチナス、其節交名カヘセ  
ト申上候、近年者廿五日交寸日記ト壱所  
ニカヘシ遣ス

一、昼後御飯出し是ハ明朝社頭ハ両社へ備  
進物今日中門迄出し置事

一、御飯出ス時職中無之テハ不可、老人ニ而モ御  
出仕有之候ハ、御飯出ス、尤職中還頭・頭坊  
客殿へ出仕有之事

但し頭坊ハ素絹也

右御飯出ス時ハ惣奉行幣ヲ持先へ出、中  
門ニテ其幣ヲ御飯ニ差置事

一、御飯出し相済ト其俣献方ハ広縁へ献之  
次第書付并諸役人之書付帳事

右書付前辺ニ認メ置献方へ相渡置事、書  
様奥ニ記ス

一、悉相済職中并還頭人其外結衆不  
残客殿ニ而夕飯出ス事

献立

みかん 大こん

チヤツ 膳 椎茸 汁こま  
人参 (仕出) 才豆ふ

チヤツ したし物 飯

香もの

引而

三ツ目 長いも

水な

つとふ

三ツ目

唐からしみそ  
風呂ふき大こん

中酒ぬりてうし

宝物 両側く

肴三種 見合

但重箱片木足打ニノセル

一、御幣部屋方相済前夜通火之用心并

刻限等別火師江申付事、委細者御幣記ニ  
有之

一、同夜後夜ニ頭屋ハ迎ニ来御幣部屋之

次第前夜之通委細者御幣記ニ有之

11月25日 一、廿五日早朝社頭へ備進物左之通

一、御飯 壺 一、吉酒 五斗

是ハ斗渡し也

但し赤飯壺石也

一、蜜柑 百 一、ノウレン昆布 五束

一、大串柿三わ

但し長串四尺五寸柿真中ニ六ツ、両ハシニ式ツ

宛五把ニテ五十本也

右者大官方

一、御飯 壺 一、吉酒 式斗

但し赤飯五斗入 前同断

一、蜜柑 五拾 一、ノウレン昆布 三束

一、大串柿 式把

但し寸法大官方同断

右之通り両社へ備進、大官方ハ三方神人  
江書状付候也、若官方拜殿惣ノ市江付ル  
也、右書状ハ升ニ挟、例年献方持參可致事書  
状認メ様奥ニ記ス、尤早朝ニ備進ス

両御門主献上物

一、御杉重 壹組

但笠式重クリ

壹重目

水仙五枚  
煎慈仙五

但杉葉敷也

式重目

切ツウメン  
(素麵カ)

但重ノ隅ニ切ツメル、長百目ナラハ五把ツ、

六十目ナラハ五把ツ、

三重目赤飯

但南天シク  
(敷)

一、御盃台 壹膳

但五ツ人形也

一、龜笠小折 壹答

一、大盛菓子 壹答

一、御樽 壹荷

右之通両門様献上、尤新御所有之時ハ今

壹通り献上、一門様方御盃台之器

金壹枚、大門様ハ重銀二枚、右器奉書ニ而

包、使者ヲ以献上也、尤使者ハ奏者之内

申付ル、書状案文奥ニ記ス

一、両門様御次之衆江八寸重箱壹重、御番堀

重ニ而一重相送ル、尤是ハ頭人御門家方

斗リ也、他門ハ不入ス也

奉行所方送り物

一、杉重 一組 一、盃台 一膳

但壹重くり足 タ、シ三ツ人形

盛様両門同断

一、積交 小折一答 一、盛菓子中折 一答

一、指樽 一荷

右之通使者奏者ヲ以相送ル、目錄添案

奥ニ記ス

院家方

一、重箱ニ而献上之通

上一重

水セン五

上一重

上ケ豆腐三

中壹重

切ソウメン五ワ  
(把)

下壹重

赤飯

外

壹重菓子 昆布 二

松風壹

ほうろく壹

まん十

ミかん壹

錫 壹対

右之通重箱四重入レ台ニノセ相送ル、尤無住

ナラハ不入、兎躰等も有之候ハ、相送ル事

唐院住持坊方

壹献

壹通り

是ハ一山客殿江遣ス通り也、外ニ長柄てうし

ひさげ共書状案文奥ニ記ス

一、一山一鷹法印斗リハ今日御出仕相見合、御出

仕無之候ハ、一献壹通り相送ル事唐院同

時、尤書状無之

一、一山并出入方祝儀来ル方へ重贈リ可致事

- 一、楽頭幣持参スル、半紙半帖わらし代式百文惣奉行へ向相渡ス、右者元入心ノ也
- 一、中番掃除者共門番・観音鐘ツキ今日<sup>(程)</sup>廿七日迄三ケ日之間昼飯支度ニ参ル、毎日ツクネ<sup>(程)</sup>ツ宛遣ス事
- 惣奉行江之送物
- 一、酒 式升
- 但樽入
- 一、切素麵 五把
- 一、赤飯 壺重
- 但堺重ニ而
- 一、菓子 まんちう  
小落かん  
ミカン  
めかしね  
こんふ
- 右之通元メ惣奉行宅江持セ遣ス
- 一、両御門主様御使者被下次ノ間江通シ何之通壺献壺通り遣ス、尤挨拶等結衆之内ニ而致候也、下部江モ玄関ニ而酒出ス、跡ニ而ツクネ壺ツ宛遣ス事
- 一、院家御使者来ル、是ハ対屋ニ而三角切吸物肴三種ニ而出ス、尤挨拶等奏者ニ申付ル事
- 一、御幣出来次第安置ス、委細者御幣記ニ有之事
- 一、客殿妻戸口ミスノ両方江御幣紙ニテミス
- ク、リ上ルヒモ付テ置也、是ハ廿六・七日御幣出ス時<sup>(御座)</sup>ミスヲク、リ上ルタメ也

- 今日入用物覚
- 一、白布 但し六丈物ナラハ三疋壺丈四尺 四疋  
尤奈良晒幅ニ而キハムル事
  - 一、杉原 是ハ大宮若宮ヒサツキ用 四帖
  - 一、杉原 是ハ廿六日社頭ニ而田楽ニ給ル 式帖
  - 一、杉原 田楽鼻紙用但し壺人分六枚 四帖  
ツ、両座分廿六折遣ス
  - 一、田楽装束・長持式指、右ハ前辺ニ改置事
  - 一、ツラノ笠、但田楽両座分 式拾四
  - 一、扇子 三十本
  - 一、高足 四本
  - 一、足駄 式足
  - 一、太鼓 式拾
  - 一、同撥 式十本
  - 一、ヘンサ、ラ 拾式
  - 御児方
  - 一、アカメ 式具
  - 一、同サケ帯 式筋
  - 一、長絹但し紐并ボタン赤也 式具
  - 一、裏頭袈裟 式條
  - 一、金末広 式本
  - 一、入髻ノ金紙 式枚
  - 一、同金銀水引右入髻用 百把
  - 一、足袋但赤紐也 式足
  - 右者御児方今日勝手ニ扈僧江渡し
  - 置事
  - 一、ヒサツキ 白布立様之事 三丈宛四ツ

是ハ大宮式ツ、若宮へ式ツ、廿六日社頭江上ル用

一、高足布 壹丈五尺四ツ

但シ田楽方両座分

一、手掛 壹尺五寸四ツ

右者田楽方両座廿六・七日両日御幣遣ス時之用也

一、鉢卷 四尺宛四ツ

是ハ御児カタ車廿六・七日両日分用

右者不残奈良晒ニテ可極事、依而立ハツシノ判

ノ有之所ヲ不仕様致置事、自然故障有之時

奈良晒ト申證拠タメ也

惣奉行江今日渡物左之通

一、ヒサツキ布三丈宛 四ツ

一、御児カタ車鉢卷四尺宛 四ツ

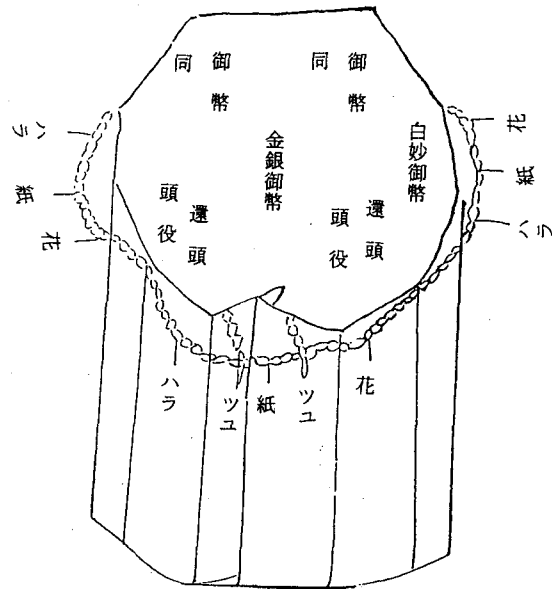
一、手拭壹尺五寸宛 四ツ

一、杉原 四帖

一、杉原 式帖

右者田楽ニ給ル也

右之通今日中ニ相渡ス事

34

中門カサリ様ノ事

一、高足 四本

但シ両座分也、尤布結付置也、結付様ハ壹丈五尺ノ布ヲ二ツ取テムスヒ付ル也、両方ノアマリヲヨコニノ置也、右片座斗ナラハ左斗リニ置也、乍去家ノ脇手ニヨル也

一、足駄 式足

但両座分也

一、太鼓

但唐皮両座分也、ドウ共

一、同撥

但両座分也 二十本

一、ペンサ、ラキ 十二

如左客殿ノツマト口カサリ置也

一、廿五日之貝時分ニ田楽両座来、役井門カ対

屋ヘ出仕ス、次ニ交寸日記惣奉行江向金中啓ニノセ相渡ス、尤昨日之交名爰ニテ壹所ニ返シ遣ス、其後田楽四・五人斗リ客殿江入テ装束拝見別儀無之、祝着申候得者、惣田楽伺公カ装束包之本ノ対屋江帰ル、其後長持所出し装束次第二入置、其俣次ノ間ニ入置事

一、田楽装束包仕舞候ハ、対屋ニ而一献惣奉行

モテナス、対屋金屏風者不成、依而田楽広縁ヘ出仕致候ハ、右金屏風ハシ壹枚折カヘシ置也尤田楽一献方一山方寺僧同前ニ出ス、三献相済候ハ、盛菓子壹ツ遣ス、但シ笠無之也、下部共江もツクネ一ツ宛遣ス、何テ相済役井門カ退

出致ス也、交寸日記奥ニ記ス

一、今日カ廿七日迄表方挨拶等亭主ハカマハス扨僧之手配、尤頭人装束今日斗リ素絹也

一、配膳小性今日者何モ素袴也、明日明後日両日者直置也

一、午之貝一山寺僧衆御出有之、互刻ニ相成候

ハ、何モ被催促致ス、右等者扨僧之役也

献之時表方加行以上者客殿、白衣之衆

者何レモ対屋、尤客殿方之挨拶扨僧

対之屋方ハ御幣出之役也

一、山何モ揃之上献出ス也、此時扨僧兩人客殿

下座広縁ニ付居也、尤献立方ハ惣奉行ヘ

下知可致事

初献 献土器

ホウヲ形式	大根
ムカゴ	雑煎 芋
ホウ六本牛蒡	焼豆腐
手壹盆	香イノ浅草苔
蓮根	五本
赤飯	

汁徳

ちやうしクハユ

肴 人參但重箱片木足打

式献目

桔梗カラシ外ニ  
土器  
壹枚ソウメン  
素麵  
同梅干  
サウメン

汁徳

チウシヤク

但シカラシ

引添 昆布三切小角

打てうじクハユ

肴 里いも

同断

三献目

桔梗 大根 ヲロシ ムキクルミ  
水仙 置

中置椎茸三

同 キカワ 煎慈仙三

打てうしクワユ

肴 牛蒡

同断

一、右之通出ス也、右一献目々々々目上々次第挨拶致  
ス也、尤三献相済盛菓子引替此時小折足打  
上々末迄引候、其保中門江直シ置也、是ハ台  
奉行之役也、尤中門ニ而何レモ皆ニ札ヲ  
付奏者ニ而院ニ江相送ル事

一、対屋方献出様客殿江同前、初献之時ハ盃

献土器ニテハ無之、五分カハラケ右盃チゴウ汁

也、其外同前、客殿方初献相済ヲ相見、対

屋初献出ス也、尤一献目ニ挨拶御幣出

し役也

一、例年今日六方集会ニ付互刻ニ相成候ハ、次ノ

間ニテ献出ス、尤挨拶等扨僧役也

一、三献トモ相済不残飯出ス、此時ハ上々末白

衣之衆迄客殿也、挨拶等ヤハリ扨僧手配

也

献立

チヤツ 人參 汁大根輪切

チヤツ カラシアエ 飯

引テ

三ツ目かふら葛引

香物 重引

中酒 塗てうし

宝ノ物

まんちう

菓子

うしや

こんふ

花ホウロ

肴三種

但重箱片木足打ニ乗ル

一、夕飯相済寺僧衆何レモ退出

一、惣仮り屋廻シツクネ一ツ宛中分以下へ遣ス

元メ方取斗事

一、暮過田楽新・本両座江米相渡、尤玄関ニ而斗リ渡ス、田楽座惣代兩人請取ニ參ル  
右惣奉行・頭屋・代官立合ニ而為斗渡ス也

米渡之覺

一、五斗俵 十三俵 一、四斗俵 壹俵

右者本座方

一、六斗俵 十三俵 一、四斗俵 壹俵

右新座方

但シ右者会所升也、本升直し兩座分都

合七石五斗也、乍併近年ハ略之、三俵斗リ会

所升○者唐院ニ在之  
○二而斗リ相渡ス、会所升止之五合也、右会所升

一、御児入髻裏頭勝手ニ致置事、扨僧役也

一、悉相済篤与挟合致、火之用心等何ハ筆進付申事肝要也

11月26日

同廿六日

一、朝七ツ過ニ扨僧ニ頭屋へ被參、奥間燭台・火鉢  
(備置)  
多葉粉盆出セ可被申事干要也

一、児御出候ハ、扨僧客殿様迄參リ役井門ハ

入レ、乗物縁之上ヘカキ上サセ手ヲトリ客殿上

座ヨリ直ニ奥ノ間ニ通シ可申事

一、其俣別火ニ茶可進、但ニ膳足打也、扨僧心得也

一、惣奉行ニ申付供之者支度為致、扨菓子部

屋へ申付御児菓子ヲ進候ヘキ扨僧役也

一、御児足袋・長絹・末広入髻相渡可申事、是ハ

今朝ニ不限勝手ニ渡し置也

一、六ツ以前ニ御児装束サセ長絹・足袋余末広

入髻ハ水引ニテニケ所ヲ結也、左右能見テ可付  
入髻ノユウメル、ハシノ上ノ児ハ右江、下ノ児ハ左ノ方  
へ行様可付也

一、入髻ノ下ヲ平モトイ、ニテク、リ、其上ニ付ル也

一、扨僧モ装束可致重衣金中啓也、白五條ハ

不入頭屋以上ナラテハ不叶也、シ、ウモ不掛也

一、六ツ時分頭屋へ參リ何角筆ヲ付今日ニ饒

リ様挟合可致テ肝要也

張紙

一、廿六日雨下ニ付中門ニ而田楽能有之、白衣衆

中広縁ニ而南向出仕

尊慈院還頭役之節、円明院依所願被申

ル事

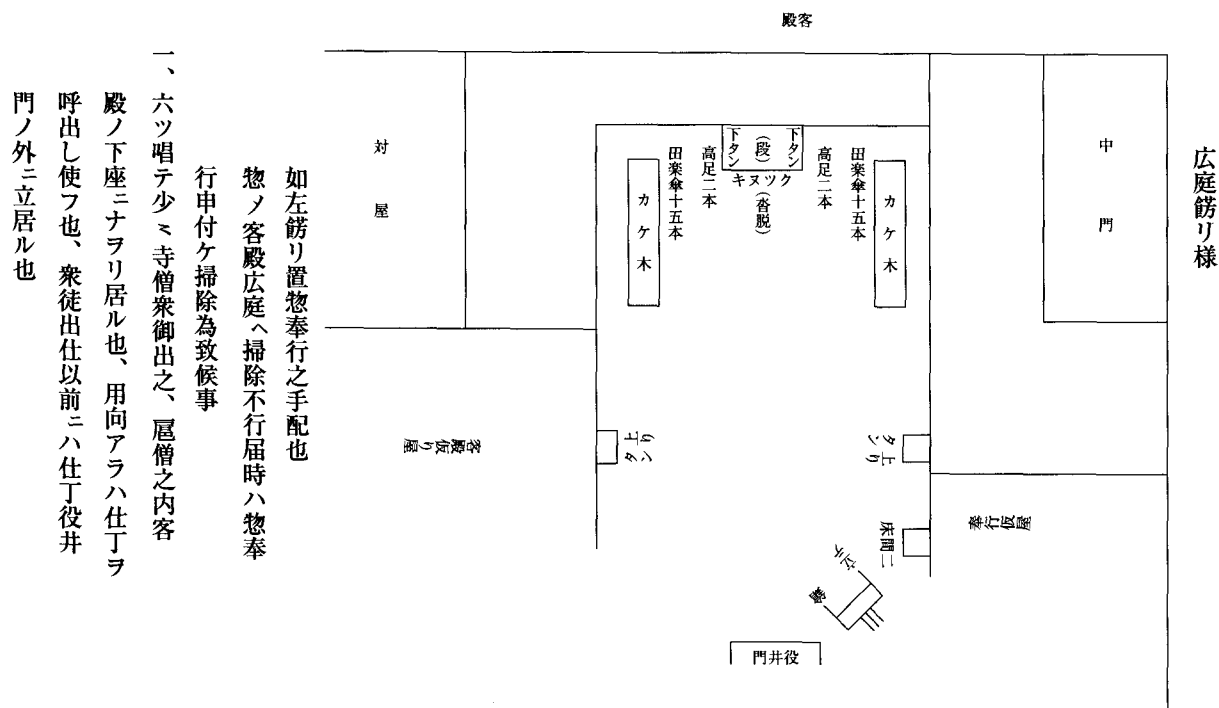
一、六ツ時頃ニ奉行所ハ警固来ル、用人老入・与力

老入・同心四人・目付式人、其外供者共役井門

ハ入テ、用人・与力ハ奉行飯り屋へ入ル也、同心ハ何

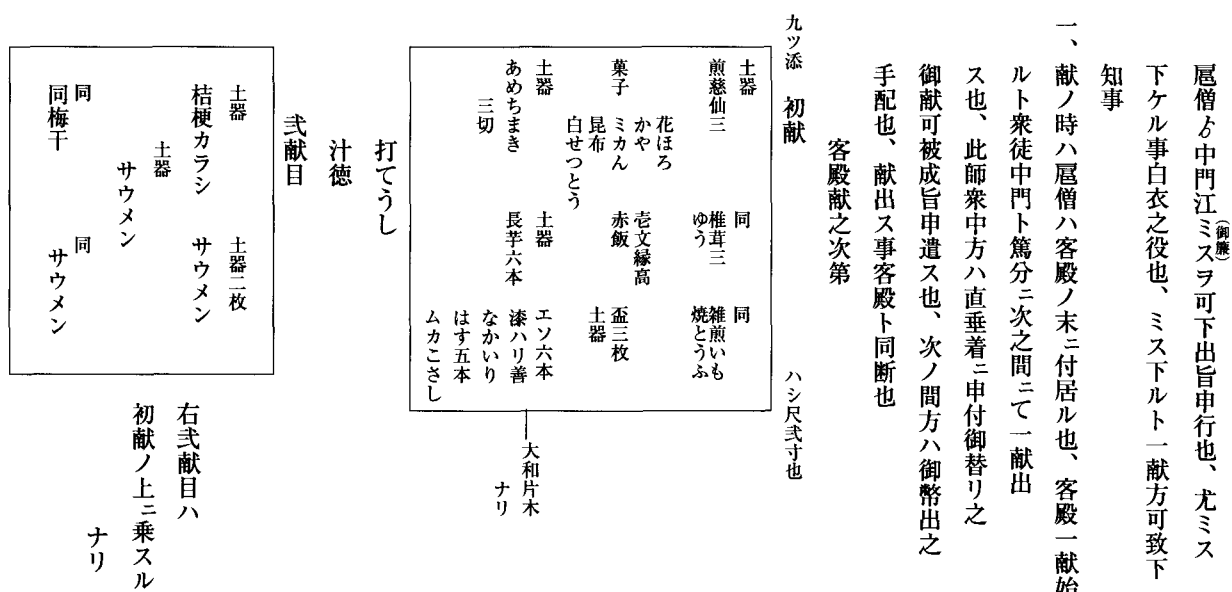
レモ前ノ床ノ上ニ居也、尤同心休足之間何

レニテも拵置事



- 一、仕丁ヲ呼様ハ妻戸口ノ上座ニ下座ノ方向テ座シ、扇子ヲ下ニ置、手ヲヒサノ上ニ置テ、仕丁<sup>(參)</sup>マイレト呼也、後ニハ大折・小折ヲ置故上座江不行其時ニハ相向ニスハリ呼也、努<sup>(ゆめゆめ)</sup>ミ手ヲツカヘル事ハ不可有之、尤扨僧之覺語<sup>(悟)</sup>有之候事
- 一、衆等出仕以前ハ田楽江之催促ハ惣奉行より遣ス也、仕丁ニテハ無之、惣奉行ニ申付、度々田楽江使ヲ可出事、扨僧之手配也
- 一、早朝田楽ヲ献請取ニ參ル、赤飯・雑煎・漆鉢<sup>(ニカ)</sup>入、酒瓶子入、カノ方ヲ桶持參候ハ、切炭式俵・酒五升・赤飯七升余、右之通献方ヲ相渡ス、尤又昼九ツ過ニ被相渡、以上兩度也
- 一、法師原宿坊江ソロウト五師・還頭・頭役客殿江出仕有之ヲ見テ、衆徒対屋江出仕有之ト、中門白衣之衆対屋方様ニ出仕也、尤白衣之衆三人斗早朝御出在之候様内ニ頼置也、但近年御出無之テハ不可、早朝御出仕有之様、近所之五師ヲ頼置也、衆徒出仕有之ト仕丁モ内へ入ル也、尤五師老人ニテモ御出仕アラハ始ル也
- 一、衆徒中門出仕有之候ハ、御児ヲ出ス、扨僧老人客殿ヲ屏風ヲアケ児ヲ可出、老人ハ奥之間ニ居テ児ノ少き方ヲ不可出、扱児ノ手ヲ引而出テ児ノエモシヲナラシ屏風ヲ客殿方ヨリ仕舞、ソレヨリ扨僧二人客殿ノ下ニ着座ノ居ル也
- 一、御児出候テ田楽出仕、ヲソクハ表ニテ妻戸口ヨリ仕丁ヲ呼何度モ早ミ可進候旨申遣ス、扨僧之心得也

- 一、田楽兩座共役井門カス、ミ直ニ打入始ル也、尤本座ハ前ヘ進ミ、新座ハ後より兩座共打入レ、相濟兩側江床木ニ掛ル、其俣庭ノ献也、此時法師原兩座共上三人斗リ、惣奉行八十徳・白袴・頭巾ヲ着シ、タイトウニテ役井門ニ立居ル也、配膳法師原カ致ス也、尤三献也
- 一、庭ノ献相濟其俣装束渡し也、交名客殿妻戸口ノ正面江出仕在之ト、客殿縁江從僧モ出ル也、尤客殿江御出仕之御衆中兩三人交名之後、口ヘナヲリ交名エモン直シ袈裟之イキヲカエシ懷中カ交名出し下ニ置ト装束案頭幣指カ田楽一膳カ次第相渡ス也、尤装束出ス事本座ハ先キ座敷末カ、新座ハ後テ中門ノ方ヨリ出ス也、尤棟梁モ付テ行キ、其年之交名ニ引合装束出ス也、小性<sup>(姓)</sup>ヘ相渡ス小性<sup>(姓)</sup>ヨリ從僧ヘ相渡ス也
- 一、装束出ス時上リ客殿ヲ受テタキ合スル様ニ左右ヲ能見テ出ス也
- 一、從僧之向様、本座ノ時ハ座敷ノ末より中門方ヘ向テ居ル也、新座ノ時ハ中門ノ縁角ヨリ客殿ノ方ヲ向テ居ル也、尤包詣端先江カ、ル様ニ持スル也
- 一、装束渡し時、一膳・二膳迄相渡し候所ニ而笛笠ヲ相渡スナリ、亦上カ末迄相渡候テ居ルヘシ装束請取ルト庭ニカサリ在之、高足・下駄・傘不殘田楽方ヘ取ル也、尤兩座共同シ事也
- 一、悉請取ト田楽立合祝言有之、祝言終テ其俣



汁徳 チウシヤク  
但しカラシ也

打てうし

三献目

酒斗リ 打てうし

一、児ノ壹献ニハ扨僧付テ行、膳ヲナラス、先ツ立退ケ、扱一献スエタラハ扨僧参リ児ニ一献ヲサセ可申、箸ヲヌクマテノ事也、扱婦ル時不残シイテ婦ル、式献目ノ時モ同断

一、酒出タラハ別火ニ札付タル銚子ニクツエ式ツ持セ扨僧付テ児盃ヲトラセ、扱婦テ末ヨリ酒ヲシイル也セマキ客殿ニテハ扨僧行テ両方ノ児ノ盃ヲ仕舞、客衆ニモ両方ヲシイテ婦ル也

一、奉行仮り屋之方モ此間ニ一献出ス也、是も別火方之事唐院・新坊・承仕取持也、挨拶等職中之内ハ被致也、頭人モ式・三度挨拶ニ参ル事、献之外ニ酒肴等昼飯迄モ出ス、別火方ニ而用意可致事

一、同心休足之間ニテ平献出ス也、尤酒肴等モモ出ス也、取持ハ御出入方ノ町家ノモノトモニテモ椅ヲ付サセ取持為致候也、尤中飯モ出ス也

一、警固供者共江モ中飯酒肴出、献壹之ツクネ  
壹宛遣ス事

一、猿楽参ル、何レノ間ニテモ奉献出ス也、尤人数六人参ル也、退出之節腰指五拾疋遣ス事、惣奉行ハ相渡ス、尤宝生座斗リ也

奉献之次第

同	桔梗牛蒡	同	大根
同	矢ハズ	同	雑煎いも
同	五本	同	焼とうふ
同	赤飯	同	

汁徳 酒塗てうし

二 献目

同	桔梗カラシ	同	サウメン
同	土器	同	外ニシル
同	サウメン	同	土器
同	同梅干	同	サウメン

汁徳 チウシヤク但シカラシ

酒塗てうし

肴三種

引添昆布三角切小角ニノセル也

三献目

酒塗てうし

まんちう  
ミかん  
菓子  
うりかん  
巻せんへい  
昆布

一、表方一献相済次第中門江ミス上テ笛申也、ミス上リ次第能可始由、法師原江表ニテ度ミ申遣ス、扨僧之役也

一、能番組可越由、仕丁以法師原へ申遣ス、承知

之由返答有之ハ、惣奉行ニ申付硯紙内證  
ヲ為持遣ス也

一、能番組差越候ハ、右番組強杉原ニ相認メ客  
殿・対之屋・奉行飯や江出ス也、客殿・対屋江者  
直垂着ニ為持遣ス、奉行飯屋方ハ所持之承  
仕江相渡、番組認様奥ニ記ス

一、能不始トモ盃台出ス、此時ハ人形五ツ沓膳、チ  
キリ・龜足ト式ツ出ス也、扨僧付行テ兒ニ盃  
取セ、盃台小性ニ申付客殿ノ上座ヲ奥之間へ入、兒ノ  
侍ニ渡ス也、チキリハ年寄衆ニ尋之カハリ客  
殿ニヲキ、能式番済ト奥之間江入レ置也

一、客殿ミス上ルト其俣大折出ス、客殿方饅頭二答  
蜜柑二答・絹カツキ式答、以上六答出ス也、中門方饅  
頭沓答、ツミマセ沓答、以上式答出ス、対屋同  
断中門ト寸様ニ出ス也

一、客殿方盃台出候ハ、中門・対屋江も同断出  
一、中門・対屋へハ盃台沓膳・木色沓膳・半サイ色  
沓膳、肴・沓里塚・打てうし、尤中門・対屋へ小性  
沓人ツ、付置事

一、兒ニ盃ノ台スヘタラハ、兒ヲ奥ノ間へ入レ別火  
師ニ申付食可進ヘク也、扨僧老人者客殿ニ  
残り、一人ハ食ク致ヘシ、必客殿ニ居事究リ  
タル事ニハアラス、兒客殿ニ無之時者扨僧モ  
客殿ニ不居メテモ不苦、兒ノ食相済候ハ、菓子  
部屋へ申付菓子可進也、兒菓子等相済候  
ハ、客殿へ出ス也

一、客殿寺僧衆此間ニ中飯出ス、何れも奥ノ間

ニテ別火師ヨリ出ス也  
一、中門・対屋方ハ次ノ間ニテ中飯台所ヲ出ス  
也

献立

チヤツ みかん 汁 霜柱  
大根 人參 おろし大根  
椎茸

中置 三ツ目  
大根 あけとうふ

チヤツ 正月牛蒡 飯

引テ三ツ目 山ノいも  
人參 松茸 水な 四方物

中酒 三献

塗てうし

肴 三種

重箱片木足打ニノセル

以上

一、能式番・狂言モ相済候ハ、兒ノ長絹上斗リ取  
テ右之手ニ扇ト持ソヘ、妻戸ニ可出也、上ノ  
兒ハ妻戸口ノ上ノ方、下ノ兒ハ下ノ方ナリ、両  
方同時ニ可出也、エリヲ客殿方ヘスル也  
一、長絹田楽取ルト其俣中門へ申、饅頭ホラスベシ  
年寄衆届有ラハ今沓答モホラスベシ、此時ハ小  
性ニ申付客殿ノヲ今沓答も中門江遣ス也

一、饅頭ホウリ仕舞ト其俣召出し也、此時ハ人形

三ツ一膳ト召出しトラ出ス也、扨僧付テ行テ兎ニ

盆ヲトラセ、上ノ兎ハ中門之方見結ヒ、三・四人モ盃

サスル也、下ノ方ハ客殿ノ年寄衆ヘ盃サスル也、肴

必一口出シヲハサムナリ、盃ハ兎ノ方ヨリノミ遣ス也

年寄衆盃済テ年寄衆ヘ挨拶シテ盃台

奥ノ間江入ル也、召出シハ不入レ、小性ニ申付引スル也

尤盃ハ扨僧取次年寄衆ヘ遣也、右等ハ扨

僧心得居ル事

一、見ツクロイテ田楽江花遣ス、是ハ鬼杉原一枚

三ツニ折テ真中ニ百疋ト斗リ書テ金中啓

ニノセテ小性ニ持セ遣ス、二度モ三度モ遣事扨

僧手配也

一、御兎大小用度ニ參可尋、万事筆ヲ付ル也

一、兎ノ召出し相済候而年寄衆仰ニ依テ仕丁

を以法師原兩座共一膳ニ可參旨申

遣ス、尤兩座參江ト客殿妻戸口ヨリハイリ

五師ト盃有之、尤例年五師中カウタイ所届

有之、田楽二・三番ウタフ也、婦リシナニ大折田楽

拜領頼也、五師中カ被遣候何合共キハマリタル

事ニ非ス何合ニも不苦也

一、能番組ハ五番、狂言三番タリトイヘ共近年ハ能壹

番・狂言式番ニテ仕舞也、尤右ハ田楽カ惣奉行

ヘ向テ相頼也、相頼候ハ、古実ヲ以差ユルス事也

一、能壹番・狂言式番ニテ差ユルス二者花遣ス事

能壹番相済テ遣ス、亦狂言壹番相済テ遣  
ス、以上兩度遣ス斗リ、尤能壹番・狂言二番相済

テ長絹ノ上ニ斗リ遣ス事

一、能始ルト壹番ニテ早マ可進旨、度ニ仕丁を

以申遣ス、少シモ早キ様ニ可致事扨僧之心

得也

一、能狂言相済中門カ饅頭ホウリ仕舞ト其俣

召出し也、此間ニ棟梁・還頭・頭人御幣出し、行

水可致事、尤何も装束等可致也

一、田楽兩座共召出シ盃等相済退出スルト、其俣

祝言可始旨法師原ヘ仕丁を以申遣ス、扨僧

手配也

一、能狂言迄悉相済候ハ、御兎ヲ奥ノ間ヘ入レ休足

サセ可申事

一、祝言相済テ其俣法師原兩座共早マ可進

旨度ニ仕丁を以申遣ス事

一、祝言相済ト客殿・中門・対屋、大折・盃台等不

残小性ニ申付可引ス旨、惣奉行申付也

一、此間ニ客殿妻戸口ノミス大キ成小性ニ申付上ヘ

タグリ上ル也、是ハ後ニ御幣出ス時用也

一、法師原兩座共進ミ候ハ、御兎ヲ出ス也、此時御

兎ヲ縁カハノ方ヘヨセ置也、御幣出ス時ニカマ

ハヌ様ニ着座サスル也

一、法師原進ミ候ハ、還頭・頭人出仕可被致旨申

入ル、尤還頭・頭人、兩人共客殿妻戸口ノ前ヘ出仕

有之ト、此時客殿御出仕之衆中之内三・四人斗

リ後ヘ行テ還頭・々人ノ手水ツカウ時ウシロヨ

リ被致セ給事  
一、還頭・頭人妻戸口ノ前ヘ出仕有之ト、其俣水瓶・

角盤小性<sup>(姓)</sup>ニ持セ、先ツ還頭ノ前ヘナラス、還頭手水ヲツカウト其俣田楽江モ銚子ニ水ヲ入レ手ニ拭ヲ結ヒ付テ小性<sup>(姓)</sup>ニ為持、客殿ノ方ヘ口ヲ向テ縁ニナラス、其俣法師原右之水ニ而手水ヲツカイモトノ縁ヘモドスト小性<sup>(姓)</sup>ニ取スト其俣御幣出也

委細者御幣記ニ有之

一、御幣出ス時、諸事台所何角静ニ可致様

惣奉行ヘ申付ル事

一、御幣田楽請取ト其俣<sup>(祝詞)</sup>ノツトウ并打入レモ相濟、其俣ニ而田楽退出スル也、両座共同断

一、田楽両座共御幣相濟候ハ、衆徒何レも退出也、中門モ同根ニ引取事

一、田楽退出スルト警固モ引取ル也、此時御苦勞之趣頭人挨拶ヲ可致事

一、衆徒・中門・田楽等引取ルト、其俣御兒奥ノ間ヘ入レ別火師ニ申付食可進、扨僧同食可致也

一、何レモ退出有ト奏者ニ申付客殿ノミスヲ

下ケサセ、妻戸口斗リ上ケ置事

一、御兒食相濟候ハ、装束為致可申也、昼ノ通り長緒ノ下斗也、扨僧者ミ、ウカケ・色袈裟也、客殿

装束ニ而出ル也、尤頭屋以上ハ重衣白五條也

一、此間ニ御兒之末広ヲ小性<sup>(姓)</sup>ニ持セ置、尤小性<sup>(姓)</sup>ハ直垂帯刀也

一、惣奉行ニ申付供廻り成り次第ニ御兒ヲ客殿ニ出ス也、五師衆又ハ年寄衆御參ル故、随分道早カラヌ様申付ル事、尤道筋ハ加行之通り、乍併其方々ニ而違フ事也

一、大宮ニテハ正面ノ前ノ掛木ニ兒ヲ立置、若宮ニテハ

カハリ東ニテ御殿ノ前ニ立居ル也、大宮ニテハ奉幣

斗リ、若宮ニテハ神楽・奉幣可進事、尤奥院

ヘモ參詣有之、若ヲソキ時ハ古実トシテフセ拝ミ

ニモ不苦、両社奉幣并神楽料前辺ニ拵ヘ置

供之者ニ為持置事、但神楽料鳥目拾疋、奉

幣料両社ニ而拾疋、以上式拾疋也

一、夜ニ入候ハ、高張箱燈灯等持セ遣事

宵宮參り供廻り左ニ記ス

上供上下着四人カ五人

還頭 小性<sup>(姓)</sup>

但兒之末広持ス也

此外小性何人ニテも

不苦也

同断

頭坊 小性<sup>(姓)</sup>

△<sup>(朱)</sup>

御兒侍カタ車

扨僧 下部

還頭 下部

外ニ 一山下僧衆侍

下部

□<sup>(朱)</sup>

御兒侍カタ車

扨僧 下部

床木持

頭坊 下部

一、右之通何角筆ヲ付事干要也

一、御兒宵宮參リハ御婦リニ役井門ハ客殿ノ妻戸

ハ入、奥ニ而装束ヌガセ別火師ニ申付可進也、相濟

候ハ、御兒婦ス也、此時乗物ヲ被取寄客殿ノ縁ノ

上ヘカキ上ケサセ其俣ニ而御兒ヲ乗セ婦ス也、尤侍下

部、箱チヤチンニテ贈ル也

一、御兒御婦之節、菓子部や江申付菓子包マセ乗

物入レ帰ス也

一、御児帰り候ハ、扈僧モ休足シテ明日ノ児ノ船裏頭拵置事、扈僧之役也

一、勝手ニ酒式升樽入・赤飯菰重、惣奉行宅江為持遣ス也、尤是ハ元メ方ノ事

一、悉相済御児ニ帰り候ハ、御幣前ヘ<sup>(行灯)</sup>アントニ火ヲトモシ置キ、御幣方何角火ノ用心別火師ニ堅申付棟梁モ退出也

一、頭屋ヲ帰り休足

11月27日

同廿七日

一、朝六過ニ扈僧頭屋ヘ被參、奥之間昨日之通認メ被申付事

一、六過ニ棟梁モ頭屋ヘ參ル也

一、御児御出候ハ、昨日之通惣奉行ニ申付供者共江モ認サスル也

一、御児装束昨日ト同断、長絹下斗リ也

一、田楽遅クハ惣奉行ニ申付、内ニ而田楽方何度モ申遣ス事

一、仕丁参り候ハ、何レノ間ニ而モ壹献出サセル事

一、馬長ノ児出ス事、委細ハ奥ニ記ス

一、田楽役井門ヲ対ノ屋中門ヘ通ル也、尤本座ハ中門、新座ハ対ノ屋也、田楽參ル其俣惣奉行挨拶シテ一献出ス也、尤今日献之間ニ惣奉行ト盃有之也

一、田楽一献之間ニ棟梁・還頭・頭人御幣出シ、昨日之通リ行水可致置事

一、田楽江之献ハ貳献也、何角相済田楽宿坊ヘ引

取ル也、尤供共江モツクネ壹宛遣ス也、尤供ノ共<sup>(ママ)</sup>もツクネ壹ツ宛遣ス也、田楽宿坊江引取ルト手桶ニツ持參、平次ニ荷ノ酒相渡ス也

一、近年者田楽宿坊ヘ引カザル例モ有之、若引取候ハ、御幣出ス時出仕可致旨何度ニテも昨日之通仕丁ヲ以可進候旨申遣ス也、扈僧之手配也

一、田楽参り候ハ、昨日之通近所ノ五師江御出仕在之様ニ人ヲ遣ス、其内寺僧衆モ追々御出仕アラハ御幣出ス也、乍併五師御出仕ナクハ不叶、壹人ニ而も御出仕有之候ハ、御幣出ス也

一、寺僧衆并五師御出仕在之候ハ、還頭・々人、昨日之通客殿ヘ出仕スル也、田楽進ミ候ハ、御児を出ス也尤今日ハ上ヲ白衣之衆迄も客殿ヘ出仕也

一、田楽モ進ミ客殿方御児も御出仕アラハ御幣出ス也、委細御幣記ニ在之、昨日ト同シ事也、尤御幣出シ田楽ヘ渡候、其俣御幣之前之ツユヲ扇ト<sup>(簾)</sup>持添、妻戸口真中江出シ置也、兩座共同断也、田楽御幣出スト兩座共ノツトウ打入レ在之<sup>(祝詞)</sup>

一、田楽御幣請取退出致候ハ、児ヲ奥之間ヘ入レ休足サスル也、奏者ニ申付客殿ノミス下ケサセ申也

一、御幣出而其俣大門ノシメラ取ラセ服忌有之衆何れモ御出仕之趣申遣ス也

一、寺僧衆御揃有ラハ壹献出ス也、尤今日六方中ハ下ノ渡リニ御出仕故遅ク候ハ、次ノ間ニ而前ヘ

献ヲ出ス也

一、田楽江之献ハ貳献也、何角相済田楽宿坊ヘ引

献之次第

初献

盃古器也

汁徳

酒でうし

式献目

チウチャク  
カラシ

汁徳

酒でうし

引添

昆布三角切小角ニ乗ル

三献目

酒でうし

落かん

菓子

まんちう  
ミカン  
巻せんへい  
昆布

以上

一、客殿ノ献相済ト奏者ニ申付ミス上ケサセル事

ミス上ルト広縁盃台打てうしカサリ置事惣奉

行心得居ル也

一、献相済次第頭屋役人并昨日之御出仕無之方へ

今日表ニ而頭人ト盃有之事

一、下ノ渡り始ルヲ見セニ遣事、惣奉行江申付

ル事并御児ノ供廻り調へ置候様是亦申付

ル也

一、酒式升樽入・赤飯壹重、昨日之通り惣奉行

宅江元メヨリ持セ遣ス事

一、下ノ渡相済候迄御児ノナクサミニ大折ノ蜜かん

ヲ客殿ニテホラセ申也、是ハ扨僧之心得也

一、客殿献相済後、門木ノ足打ニ赤飯ヲ入テ懺

悔サシテ客殿ノ縁妻戸口ノ所へ出置也、尤拜見

ノ者ニ載カセル事

一、案頭幣持東金堂へ出仕故、酒式升樽入・白飯

ツクネ遣ス也、元メ方之事

一、下ノ渡り始ルト御児へ食可進、大小用能サセテ装

束可致事、アコメ・サゲ帯・裏頭也、扨僧モ装束

致置也

一、下ノ渡り相済ト御児ノ仕丁来ル、其俣壹献サスル

也

一、仕丁壹献之間供廻り広縁江廻し置、行列昨

日ト同様也

一、御児松ノ下へ出仕前、別火師ニ申付、氷砂糖・蜜

柑少メ用意致置キ、松ノ下江持参シ、児退出ヌ

ヨウニ内證ニ而可進也、尤菓も少メ持参ノ児目

ノ無事有之時用意也

一、仕丁壹献相済候ハ、広庭江廻ル、御児出ス也、扨

僧モ今日者打掛ケ袈裟也、道筋早カラヌ様参

ル事昨日ト同断、何レニ而も穴門者不通也、直様

ニ御旅へ参詣也

一、御旅所仮屋ニテハ床木取寄セ腰ヲ掛サセ可

置也、必東ノ仮屋へ可行也

一、何レモ寺僧勤相済ト、如始行列ニ而直ニ松ノ下江

行也、寺僧衆ノ座ノ西ノ方ニ床木ヲ取寄立セ、扈僧ハ  
両脇ヘ付居也、尤衆徒ノ方ヲ見合裏頭可致事也

一、奉行松ノ下江出仕在之ト衆中ヨリ、児ニ御出仕アレ  
ト仕丁ヲ以テ申来ル、時ニ衆中与見合セ出仕ス、松ノ下  
上壇ノ真中より西ハ衆中、東ハ一山寺僧衆也、児ヲ  
上リ壇ノ前ニ床木ヲナラシ腰掛サセ、扈僧両脇ニ  
立居ル也、尤児ノ侍ニ申来、床木ウコカヌ様ニ侍ニ持セ  
置也、児モコケヌ様ニ腰ヲ侍ニ持セ置事、随分筆ヲ  
可付事

一、渡リ相済前ニ田楽松ノ下進ムト、渡是迄ト衆中  
直ニ案内有之、右次第ニ申達渡相済候ハ、如始  
行烈ニテ馬場還リ山ノ上菩提ハ不苦寺内登  
大路ノ時奉行直ニ御旅江被參ル故、其供ヲ仕丁ノ  
フラヌ様ニ申付置也、且ツ見合可行兼而侍共江  
も申置也

一、馬場還リも昨日同断、児ヲ直ニ奥之間へ人装束  
取ラセ別火師ニ申付食可進也、食相済候ハ、昨  
日之通菓子部や江申付菓子ヲ包マセ乗物  
ニ入レテ御児ヲ帰ス也、右等扈僧之手配也

一、装束長絹ノ下アコメ・サゲ帯・金末広・裏頭袈  
裟・入髻皆ミニ通り扈僧ヨリ請取ル事

一、馬場還リ客殿ニテ夕飯出ス也、此時上ヨリ役人  
モ不残客殿出スル也、尤挨拶等頭人可致事  
一、夕飯ノ上ニテ頭人ト役人不残皆ミヘ盃有之、此時  
別火并番師ハ水ノ物出也

一、六方中ハヤフサメニ御出仕故、先江次ノ間ニテ夕飯  
出ス也

献立

夏ミかん あけ麩

チヤツ膾

大こん 椎茸  
くり 生ガ

汁

たぬきしる  
こんにやく  
大根セチリン

香物

飯

平皿

松たけ  
水な  
上ケふ

引而

茶碗

大老ツ盛ひりようず  
きんなん  
メジ

引菓子

但し宿しふた  
汁牛蒡

まんぢう  
ミカン

但し二重打紙敷

中酒

三献

塗てうし

肴三種

くわゐ  
牛蒡  
ゆは

外ニ

水のもの 肴いろく

一、無滞相済旨ニテ板本ニも酒エン有之、其節ニ

頭坊板元江挨拶ニ可参事、尤足無之盛菓

子餘リ有之候ハ、板元ヘ壹宛可遣ス事

一、首尾能相済客殿ニ而酒エン有之、此時惣奉行  
其外役人共不残呼寄セ無滞相済ル旨、酒ヲ

11月28日

シイテ何れも大迷躰、無滞相済目出度退畢  
廿八日

一、朝五ツ時頭屋へ参り跡片付并諸役人之祝儀物  
等拵之事

御児祝儀物之覚

一、金銀極彩色盃台 人形五ツ 一膳

一、同台 人形三ツ 一膳

一、チキリ 一膳

一、入簪 一ツ

一、金末広 一本

一、ヒジ綿 壹把

但シ料物ナレハ金百疋ト或ハ銀五両ニテ  
近年ハ金百疋也

一、吉野杉原 壹束

但同断南鐙壹斤

一、竹葉 壹荷

一、積 兩種

但料物ナラハ青銅三十疋也

右之通御児兩人共同断

棟梁江之祝儀覚

一、カキ板 但シ料物ニテ入魂之節ハ  
合百疋 二枚

一、定木 式本

一、ソツタイ板 式枚

一、物着 式本

一、小刀 四柄

一、挟竹 壹巴

一、ヘラ 壹巴

一、白銀 式枚

一、伊予杉原但料物ナレハ金百疋 一束

一、青銅 但竹葉壹荷兩種料 三十疋

御幣部屋之衆中江祝儀之覚

一、白銀 但延紙五束料也 式両

一、青銅 但壹荷兩種料也 三拾疋

右之通五人分棟梁方へ遣ス也

交名祝儀之覚

一、御幣傘 一本

一、青銅 五拾疋

一、同 但竹葉壹荷兩種也 三拾疋

右之通兩院共同断

扨僧江之祝儀

一、裏頭袈裟 壹條

一、青銅 五拾疋

一、青銅 但壹荷兩種料 三拾疋

右之通兩院同断

御幣出し祝儀

一、青銅 百疋

一、同 但壹荷兩種料 三拾疋

右之通兩院同断

台奉行祝儀

一、青銅 五十疋

一、青物 一台

右ハ極リタル事ニハ非ス頭人ノ心持  
次第也、併近年ハ大概如此

田楽宿坊祝儀

一、白銀 三両

一、青物 一台

(後書人) 一、近年者色々在之、天保九年多頭役之節  
學賢院借用、尤換拶金百疋送ル

右同断

一、上分之祝儀大概如此、中分以下ハ別帳ニ有之ル也

一、今日者役人不残跡片付ニ頭屋江參ル事ナリ

尤昼飯酒等出ス也、是ハ献立ノ極タル事ニハアラズ

頭人ノ心次第也

一、ヒブツ礼トシテ金百疋添御師江向ケモトス事

ナリ

一、今日天氣後日御能有之候ハ、惣奉行江口切と

して酒式升樽入遣ス也、尤下行米三斗相渡ス也、雨

天ニ而能無之時者口切并下行米等不遣也

一、天氣能後日御能有之候ハ、御旅所江小休幕取

置事、右休幕へ遣ス物左ニ記ス

一、竹 廿五本 一、幕 貳張

一、筵 五枚 一、長疊 三枚

一、瓶子 貳ツ 一、檜槌 一荷

一、打銚子 貳ツ 一、松明 十五対

一、高張 壹張 但し右竹ニ而前辺ニ

拵へ置也

一、燭台 一對 一、手燭 貳本

一、金輪 壹ツ 一、小釜 壹ツ

一、平茶碗 拾 一、塗銚子 二ツ

一、片木 十 一、茶 少シ

一、土器 卅 一、箸

一、香物 少シ 一、白飯 五升斗

但塗桶ニ入レテ

一、煮メ提重 一、縄 少シ

一、酒 六升斗 一、炭 少シ

一、油 少シ 一、割木 //

一、蠟燭 十五本

右之通御旅所休幕へ遣ス也、尤後日御能之跡

ニ而田楽庭ノ献有之、尤暮方々惣奉行休幕江

詰居ル也、右等元々方心得之事

一、廿九日両門様へ參殿ス、右者廿五日御使者被下候

御請ニ上ル、尤竹葉壹荷積両種献上、頭人用事

在之ハ名代ニ而も不苦也

別火師江渡物之覚

一、洪碗 拾五具 一、木皿 十五

一、トラ折敷 貳拾 一、板折敷 十

一、天ノ川桶 貳ツ 一、三イレコ 一組

但し右桶白米五升宛入レ遣ス也

一、火打箱 一ツ 一、スリ鉢 一ツ

但し石金ホクチトモ 但しレン木トモ

一、ホウロク 二ツ 一、大丸火鉢 一ツ

一、大土ひれ 二ツ 一、土風呂 壹

一、杓子 三本 一、杓大小 四本

一、小ひ杓 一、手水桶

一、手拭 二ツ 一、水桶

一、チリ取 一ツ 一、居風呂 一

一、ユカタ籠 一ツ 一、ユカタ 一

一、手洗 一ツ 一、茶碗 二十

一、箸紙杉原 一帖 一、茶袋 一

一、スイノウ 二ツ 一、田楽串

一、セツカイ 一、上茶

一、蠟燭	一、味噌	一、壺升杓 一本	一、五合約 一本
一、塩	一、醬油	一、蕨 四枚	一、素麵コシキ
一、油	一、酢	飯方江渡物	
一、炭	一、ツケ木	一、中杓子 二本	一、小杓子 五本
一、赤土器 五十	一、錫 一対	一、イカキ <small>大</small> 二	一、餅桶 二
一、引盃 二十	一、積重箱 一組	一、壺升杓 一本	一、餅桶 二
一、七ツ釜 一組	一、箒 一本	一、新桶 一	一、五合約 一本
一、イカキ <small>大</small> 式	一、タバコ <small>（盆）</small> 三ツ	但し別火方用	一、小スイノウ 一
一、シキシ	一、火舎 二	釜屋へ渡物	
一、燭台 五本	一、手燭 五本	一、大コシキ 一	一、餅桶 三
一、小ジメ	一、白米	一、四ツ組桶一組	一、イカキ 二
一、二ノ足打 廿	一、片木足折 五膳	一、壺升杓 二本	一、五合約 二本
一、鉄キウ 式本	一、田楽火鉢 一	一、カイゲ 二本	一、スイノウ 竹大小 三 毛大小 二
一、五分土器	一、コトク <small>大</small> 二	一、杓子 拾本	一、御飯イカキ 二 但し簾未成イカキヨロシキナリ
一、ハサビヲロシ 一	一、料理鍋 一	惣奉行江渡物	
一、フノリ 五匁	一、荒コモ	一、折敷 一膳	一、椀 一見
一、イ草履 二足	一、中貫草 <small>（履）</small> 六足	一、茶碗 一	一、キセル 一本
一、火箸 一膳	一、安田 十枚	一、タハコ	
一、餅		一、春日座大工并木挽・塗屋等両座とも前段ニ記し有之故略之	
但し入レ子ニツニ入釜屋へ相渡ス			
右之通別火師へ相渡ス事			
肴師へ渡シ物			
一、五升釜 一	一、三升鍋 一	別火師江渡物覚	
一、カン茶瓶 一		一、天川福桶 二	一、切バレ 一
右之通肴師へ相渡ス也			
素麵方江渡物			
一、イカキ <small>大</small> 二	一、餅桶 二	一、包丁 一	一、餅入サイトウ <small>料二百文也</small> 二
		一、折敷 <small>料二百文也</small> 一	一、椀 一具
		一、茶碗 一	一、キセル 一本
		一、多葉粉 二	

別火師江手伝へ渡切物

一、板折敷	一	一、碗	一具
一、キセル	一本	一、タハコ	
一、茶切		一、火打箱	一

料百文也

釜屋兩人江渡切物

一、折敷	二	一、碗	二具
一、茶碗	二	一、キセル	二本
一、タハコ			

鍋釜之覚

一、大釜	三	一、鍋	七枚
------	---	-----	----

別火坊

一、五枚鍋

右大釜二ツハ別火方湯釜也、亦壺ハ釜屋方中  
壺ハ直し釜素麵方也

古器之覚

一、五分	三千五百枚	但料	三十五匁
一、ス、キ	貳千枚	同	六百文
一、ミト	三百枚	同	百五十文

米酒之覚

一、酒		一、味淋酒	
一、餅		一、飯米	
一、小豆		一、醤油 当時八百方	
一、味噌八百方		一、極上之白味噌八百方	
一、塩 八百方		一、上ケ油	
一、燈し油			

頭屋人数割

一、惣奉行	三人	一、別火師	一人
一、板元	三人	一、別火板元	一人
一、別火配膳小供	三人	一、奏者	四人
一、配膳小性 <sup>(姓)</sup>	十五人	一、小性廻シ <sup>(姓)</sup>	二人
一、肴師	一人	一、肴師板先	二人
一、肴師手伝	三人	一、從僧	一人
一、藏奉行	四人	一、借物師	一人
一、借物師手伝	一人	一、荒神供	一人
一、茶道	一人	一、台所板	一人
一、板先	一人	一、献方	三人
一、膳方	四人	一、下ノ膳方	二人
一、湯番人足	二人	一、風呂番	二人
一、釜屋	三人	一、玄關番	二人
一、人足廻シ	二人	一、米蔵	二人
一、醤油蔵	一人	一、青物蔵	一人
一、味噌蔵	一人	一、火用方	一人
一、燭台方	一人	一、多葉粉盆	廿一人
一、洗方	二人	一、公人 配膳方	八人
一、飯方	三人	一、素麵方 <sup>田楽</sup>	二人
一、油方	一人	一、小遣	六人
一、ツクネ	二人	一、水汲	三人
一、門番	一人	一、掃除方	三人
一、飯番	一人	一、田楽宿坊世話人	一人
一、カタ車 <sup>(車)</sup>	二人	一、台所入口番	二人
一、床木持	二人	一、御見先供	十人
一、馬長侍	二人	一、馬長大童子	一人

- 一、馬長世話人 一人 一、馬長方裁 三人
- 一、玄関作屋目附 一人 一、上ノ洗方 二人
- 一、夜番 二人 一、台所目附 三人
- 一、元ノ 五人

諸役人割人数近年大概如此

諸下行米之覺

- 一、式百六十式石八斗式升 頭屋兩座分

内五拾石者折棒々十日過ニ請取、亦五十石十一日ハ十五日迄ニ請取、百石ハ会合々廿五日迄請取、残り六十二石八斗二升ハ廿九日請取

- 一、拾石 還り頭

- 一、五拾石 田楽新・本兩座分

内石ニ付六升引、正米四十七石相渡ス也

- 一、七石五斗五升 同兩座分飯米

- 一、式石 惣奉行兩座分

右之外ニ田楽ヨリ壱石唐院蔵ニテ廿九日ニ受取、尤兩

座分、片座ニ付五斗宛

- 一、式斗 大盛菓子料

右一答ニ付壹斗宛、中盛菓子料壹答ニ付七升、其外小折

并田楽方足無し兩様共壹答ニ付五升宛也、右ハ時ノ人数

程申付、乍然近年ハ田楽方頼ニ隨て盛菓子ナシ、右者料

物ニ而遣之、依而此度文化八末年円明院頭屋ヨリ惣奉行

頼ニ依テ大盛菓子壹答ニ付二斗宛、中老斗四升ニ増

遣ス也、尤田楽方盛菓子無之故、以前之通田楽方盛菓

子有之時ハ大盛・中共、以前之通可相渡也

- 一、四匁五分 龜足料

- 一、三匁五分 積交料

但一合ニ付テ之直段也、時ノ人数程申付ル事

- 一、三匁二分五厘 (召出し白料  
但台ニツ料也)

- 一、三斗 (後日御能ニ付  
惣奉行下行)

- 一、五升宛 (楽頭兩人  
幣持兩人)

但石ニ付六升引也、併引不引者頭人ノ心次第也

- 一、八升宛 力者

但裝束無之者ハ三升引相渡ス也

- 一、式石 経師 兩座分

近年壱石六斗

- 一、式斗 從僧一人

- 一、式石四斗 御幣大工兩座分

但近年カンナノ代トモ本器二石也、當時一石ニ而よし

- 一、三斗 同木挽兩座分

- 一、當時

- 一、壱石 同塗師兩座分

但内六升引也、近年ハ不引

- 一、壱斗宛 御児供ノ仕丁

但人数ハ頭人ノ心次第也、併近年ハ七・八人歟

- 一、式斗 別火師

- 一、壱斗 同手伝

- 一、式斗 肴師

- 一、壱斗 借物師

- 一、壱斗 同手伝

- 一、壱斗 楽器彩色料

- 一、壱斗 コイワ料

- 一、三斗 釜屋

- 一、三斗 白飯方

- 一、三斗 赤飯方

- 一、式斗 素麵方

諸書物之覚

祈祷廻章案文

不動院法印大僧都 勸修坊々々々々々々々

来何日転読大般若經、恐申度候、辰之貝定於何院  
辺御来臨所仰候而已

十一月 日

右廻章中奉書横折也、尤濁穢ハ不叶、臈分者裁テ  
モ不苦也、表包美濃紙也、但中臈迄ハ院号、以下ハ仮  
名也

同シシ会有之候節別廻章

来何日祈祷之儀ニ付、以内證之儀、無業之日中  
飯進申度候、已貝定於何院辺御来儀所仰候  
以上

十一月日

何院

何院

同服者別廻章ノ案文

来何日祈祷之儀ニ付、無業之日中飯進申度  
候、已貝定於何院辺御来儀所仰候以上

十一月日

何院

何院

如此中奉書横折ニ相認メ上包美濃紙也

同唐院・新坊・奉行へ遣ス廻章案文

来何日祈祷之儀ニ付無業之日中飯申付候、已貝定  
於何院辺入来待申候以上

十一月

何院

実名

道益房

玄中坊

々々々

々々々

此如中奉書カ小奉書カ不苦、横折表包前同紙  
祈祷木札書様左之通

奉祈祷轉讀大般若經六百卷院内安全処

日出山対馬守ハ例年御幣作小刀相納候節意

趣書

奉献打物之事

一、御幣作御刀 一对

一、同御用小刀 一对

右者御当杜御祭礼御用之御刃物奉献之条志願之

意趣者愚家之

先祖当 御神明之蒙 御神慮

鍛冶之妙道学伝子孫家族爰示本家之嫡流

右為平城住

天帝之御鍛冶職を司、日本鍛冶宗

匠三品伊賀守藤原朝臣号令道先祖之顯

釵德遠国所ニ至迄広太成類葉然ルニ某

当前所居住其術を学伝故為 御神息歳々

御祭礼御用之御打物奉献者也

南都鍛冶所

文政二乙卯年十一月 日出山封馬守

御頭役 金永書判

何院様

御代官中様

如此中奉書ニ相認メ表包同紙表書ニ日出山封馬守金永ト斗リ相認メ有之

同当方ハ遣ス意趣書案文

南都鍛冶所

封馬守藤原金永

往昔依春日社靈感因縁若宮祭礼之御例

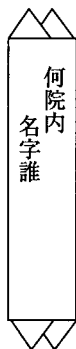
霜鉄四柄寄納之事、偏家内繁栄之奉仰神慮

擁護者也、仍如件

年 月 日

蓮成院官位実名書判

右之通中奉書二枚重ニ認メ上包同紙一枚左之通



衆中ハ来ル状案文

当年若宮祭礼田楽頭役之事、以御敬神之

儀、如先規両頭被勤仕候得者、可為珍重之旨、衆中

集會評定候也、恐メ謹言

十一月十七日 沙汰衆等

実名官位御房

右之通大奉書二枚重切封し上包同紙壹枚表書左之通

実名官位御房 沙汰衆等

但裏ニ衆中ト有之也

同頭人ハ返状案文 実名

当年若宮祭礼田楽頭役之事、両頭可令勤仕之由得其意候、雖可為如形之式、可令調法候旨出御集會

可預御披露候

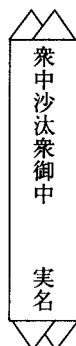
恐メ謹言

十一月十七日 仮名官位

実名

衆中沙汰衆御中

如此大奉書二枚重切封之上包同紙壹枚表書左之通り



但此裏ニケ名官位書之

精進入廻章案

来廿日精進入之儀ニ付無業之夕飯進申度候

未之刻於 何院迎御来駕所仰候以上

十一月 仮名官位

実名

不動院法印大僧都

勸修坊法印大僧都

妙喜院々々々々々

何 院

如此中奉書横折(四ツ折)<sup>(後注)</sup>上包美の紙、尤右廻章ハシシ會并服者等有之候共別廻章ニハ不及也

同唐院部坊奉行ハ廻章案

来廿日精進入ニ付無業之夕飯申付候、未之

刻於何院迎来儀待入候以上

十一月日 院号 実名

道益坊 玄仲房

~~~~~

如此中奉書横折表包美濃紙也

板元廻章案文

装束包廻章案文

不動院法印大僧都 何院

何院 何院

来廿五日若宮祭礼田楽頭役装束裏一

献如形致其沙汰候、午貝定於

何院迈入御前仰候而已

十一月日

如此中奉書横折上包美濃紙、尤右廻章ハ方

々相分ケ一通者菩提山ノ方、今一通ハ寺内登大路

方以上兩通認置也

同唐院新坊へ廻章案

来廿五日若宮祭礼田楽頭役装束裏一献致

其沙汰候、午之刻於何院迈入儀待人候以上

十一月日 何院

実名

道益房 玄仲房

~~~~~

此如中奉書又ハ小奉書ニ而も不苦、横折表包美濃紙也

直垂着并上下着廻章

就若宮祭礼田楽頭役之儀来廿五日上着、廿

六日・廿七日直垂着座申度候、無相違被召具被

下候ハ、可忝候由、得其意候

恐々謹言

十一月

ケ名官位

実名

不動院 御坊中

何院 御坊中

如此中奉書ニ相認メ表包美濃紙、尤中臈

迄也、以下ハ廻章ニ不載事

馬場還リ廻章案

不動院法印大僧都 何院

何院 何院

~~~~~

来廿七日若宮祭礼馬場還於何院迈入

御前仰候云

十一月日

如此中奉書ニ相認メ横折、尤方々相分ケ兩通ナリ

装束包廻章ト同断上包美濃紙也

西大寺唐院江之状案

就若宮祭礼田楽頭役之儀、明後從廿五日至

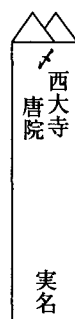
廿七日三ケ日間、西大寺愛染明王開帳仕候、仍而

可為御捧物鳥目三拾疋送致進入候、被得其意候ハ、

可為本望候、恐々謹言

十一月廿三日

如此中奉書堅紙左之通り 式枚重ね



裏ニ興福寺何院ト書候、尤  
興福寺ハカタガキ也

三方神人江遣ス状案

就若宮祭礼田楽頭役之儀、赤飯壺石吉酒五  
斗肴三種令備進候、於神前御祈念頼申候  
恐々謹言

十一月廿五日

何院

実名

三方神人中

中奉書横折上包美濃紙返事、上包無之

拜殿惣ノ市ヘ之状案

若宮さい礼てんかく  
(田楽)

とう屋之きニ付あか飯五斗

酒式斗肴三しゆおくり

たくはいてんニおゐて  
(拜殿)

御きねんたのみたく

めてたくかしく

十一月廿五日

中奉書二枚重切封し上包なし

表ニはいでん

惣の市とのへ 実名

参 表ニケ名

両門様江贈膳状案

就若宮祭礼田楽頭役之儀、乍憚御杉重壺組

御盃台一膳・亀足小折壺答・盛菓子壺答・御樽

壺荷、献上仕候洩御披露所仰候、恐々謹言

仮名官位

十一月廿五日

実名

誰法印御房

大奉書横折上包美濃紙、尤時ノ坊官上席名当  
ニ而遣ス也

院家江之状案

就若宮祭礼田楽頭役之儀、乍憚寄御一献

壺通・金銀極彩色盃台人形三壺膳・積交

小折壺答・盛菓子壺答・御樽壺荷、致進上

候、誠ニ表御祝儀迄ニ御座候、恐々謹言

假名官位

実名

十一月廿五日

何院殿

奉行所江目錄状案

目録

一、御杉重 壺組

一、金銀極彩色盃台 壺膳

一、積交小折 壺答

一、盛菓子 壺答

一、御樽 壺荷

以上

右大奉書横折ニノ折中之段ニ音物書、近年ハ目錄ニ  
候得共前々ハ書状之趣古記ニ相見江候、依之為覚  
(傳) 語記シ置也

就若宮祭礼田楽頭役之儀、乍憚御杉重壺

組・御盃台・膳・龜足小折・沓・盛菓子・沓・御樽・沓・進覽仕候  
誠ニ表寸志迄ニ御座候、恐々謹言

十一月日 何院

実名書判

中坊誰殿

唐院持主坊へ書状案

就若宮祭礼田楽頭役之儀、一献一銚子贈  
致進入候

恐々謹言

十一月廿五日

中奉書堅紙左ノ通沓枚也



裏ニ何院卜書也

饗対日記書様之事

饗対記

同重

一具

一、楽頭衣

一、幣持衣

一、笛水干

一、笛指貫

一、平水干

一、平指貫

一、強帷

一、単帷

一、出腰

拾五

拾二筋

拾三具

拾三具

拾二具

拾式具

一具

一具

右之通御幣紙横折新・本両座分ニ通り認ル也、時  
々田楽被申請帰ル也

田楽交名書様之事

新座田楽交名之事

楽頭法師

幣持法師

市松法師

藤松法師

時若法師

二鴈装束渡笛笠相渡ス也

一、石帶 沓筋

一、鼻紙 拾五

一、扇子 拾五本

一、笛笠 一ツ

一、綾蘭笠 拾二

一、太鼓 五ツ

一、同撥 拾本

一、腰皮 五ツ

一、高足 二本

一、同布 式筋

一、傘 拾五本

一、足駄 沓足

一、御幣傘 沓本

一、頭上絹輻 六筋

一、編木 六ツ

一、襷 沓本

以上

ミミミミ

右交名目分モ過

一、臈法師

拵認置、是ハ装束  
渡之節心エル也

二、臈法師

三、臈法師

以上

如此御幣横折ニ新・本両座分ニ通認、尤口書之處本座ハ  
本座ト書キ、新座ハ新座ト書、尤其年之交名ニ引合書也

田楽装束札書様

楽頭法師

如此楽頭法師ハ田楽不殘年之交名ト引合認ル事

入日記書様之事

入日記

一、楽頭衣

同重  
袴

二具

一、幣持衣

同重  
袴

二具

一、笛水干

二具

一、同指貫

二具

一、平水干

二十四具

一、同指貫

二十四具

一、強帷

二十六具

一、単帷内十二具ハ金ノ丸アリ

二十六具

一、出腰

二十二筋

一、裏絹

三十

一、石帯

二筋

一、鼻紙  
壹人前ニ六枚四折也

三十

一、扇子  
内四本ハ力玉丸ノ銀ノ丸三十本

一、笛笠

二ツ

一、綾蘭笠

二十四枚

一、太鼓

十

一、同撥

二十

一、笛笠

二ツ

一、腰皮

十

一、高足

四本

一、同布

四筋

一、足駄

二足

一、傘

三十本

一、御幣傘

二本

一、頭上ノ絹

笛二本  
平二十四筋

一、編木

十二

一、襷

四筋

一、楽頭衣布

二筋

一、チサカノシツケ

二腰

一、皆水精念珠

式連

一、長絹腕

式具

一、白五條

式帖

一、金末広

式本

一、金入髻

式

一、アコメノ柏

式

一、降帶

二筋

一、足袋

式足

一、板床木

式

一、田楽手拭

四筋

一、羅箱蓋

式

一、ヒサツキ布

四筋

|                        |                       |       |                     |
|------------------------|-----------------------|-------|---------------------|
| 一、掛絹                   | 二卷                    | 第二献   | サウメン<br>ソウメン        |
| 一、ハチマキ                 | 二筋                    | 引ソエ   | 第三献                 |
| 一、鈍色白五條                | 二通                    | シイタケ  | スイセン<br>イリチセン       |
| 一、衣帯                   | 二筋                    | クワシ   | 以上                  |
| 一、金中啓                  | 一本                    | 以上    | 如此鬼杉原をつき認ルなり<br>(鑑) |
| 一、吉野杉原                 | 四帖                    | 張帳書様  | 経営衆                 |
| 大宮<br>若宮               | 式帖                    | スエサカナ | 治郎太夫                |
| 一、同田楽方                 | 式帖                    | セキハン  | 武平六                 |
| 一、惣奉行頭巾                | 巻                     | サウニ   | 喜平                  |
| 一、ヒブツ                  | 唐紙二<br>スリハリ二<br>コシ刀刀二 | ソウメン  | 午札岸                 |
| 以上                     | 以上六ツ                  | 引ソヘ   | 源九八                 |
| 如此中奉書式枚ニ而も三枚ニ而も、として認ル事 |                       | スキセン  | 長平                  |
| 頭屋ヨリ別会伍師江遣ス、田楽交名書様之事   |                       | 板元    | 織太<br>源太            |
|                        |                       | 別火師   | 元八                  |
|                        |                       | 肴師    | 元七                  |
|                        |                       | 借物師   | 織助                  |
|                        |                       | 奏者    | 平三<br>平治<br>軍内      |
|                        |                       | 小性廻   | 小六                  |
|                        |                       | 釜屋    | 信八                  |
|                        |                       | 飯方    | 夜鉄                  |
|                        |                       | 人足廻   | 村田                  |
|                        |                       | 玄関番   | 米助                  |
|                        |                       |       | 百助                  |
|                        |                       |       | 道礼                  |
|                        |                       |       | 平太礼                 |

|                 |     |               |
|-----------------|-----|---------------|
| 献立之書様           | 初献  | スエサカナ<br>セキハン |
| 如此鬼杉はら横折目録トモ    | (正) | 百匹            |
| 以上トモ書事不入三ツ斗リ認ル事 |     |               |

如此鬼杉原二枚重横折ニして三ツ折遣ス、或者  
福寿万寿ト書テモ不苦也  
廿六日田楽江之掛物書様  
左之通

|    |    |
|----|----|
| 福寿 | 徳寿 |
|----|----|

門番

ノ藏

茶道

茶礼七

藏奉行

談八

元ノ

内記  
左近  
右近  
元開

惣奉行

重藏

如此鬼杉原ヲツキ認ル事、尤夫ミノ人数者頭人ノ心次第

唐院公物江借物之書状案文

就若宮祭礼田楽頭役之儀、公物金屏風何双・風

呂釜・茶碗台・下水水桶何荷・大台子壹通、借

用申度候、無相違被仰付被下候ハ、可忝候、恐ミ謹言

十一月 日

実名

別会伍師

御坊中

如此堅帟也表書左之通り

右借用之品ミ前辺ニ能ミ致吟味置事

頭屋下行米請文書様

請取申頭屋米之事

合何拾石

右所請之状如件

何院

年号月日

実名判

唐院

御奉行所

如此堅紙ニ認ル也

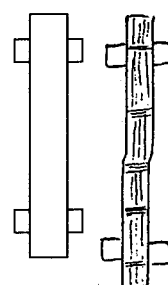
一、御幣申仕立ケ寸法吉野木ふしなし

長寸八尺五寸 厚サ六歩

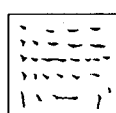
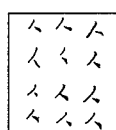
幅八歩 且引掛ケ金尺ニ而

壹尺四寸

一、祈禱前日中門御幣木飴り様



御幣紙色此紙ハトンボ用 左紙ハクツマキ用



一、御幣キンカイシメ長サ七ヒロ余也

天保八年十一月廿三日

一、奉行所ハ呼来承仕宗廣被出候処、与力羽田鎌左

衛門被出達、当年奉行初而之義ニ付、例年之通来廿

六日田楽頭役式拜見候、宿坊江被参候間、先例之通御

取斗可在之旨、御職中江達也、引段内ミニ而

天保二年摩尼珠屋并円明屋ニ於頭坊之節

御供頭壹人御近習壹人ハ中小性式人、御案内式人は迄

支度差出

従工以下ハ普賢院ニ而休足、一統江組従工以下御手廻リ

式拾式人江酒五升・豆腐五丁出

右之義手廻リ式十式人江龜柄茶横ニ而モ出呉候様内ミ

頼在之宗廣心得ヲ以断申入候処、御尤之儀左様候ハ、

献一ツ宛成共遣也、是非頼ニ付其儀候ハ、五師中也、可

申入旨、罷歸り五師中江申入之處、頭坊其外相談之處、当年遣候而ハ先例ニも被成候間斷申入、可然候間読天保十一年

仙洞様崩御被為在、右頭屋田楽庭之式立合祝

意能等無之、打入狂言在之、若分衆評定之處、右治定先年も同様也

観音院

栄憲

『庁中漫録』三四「春日若宮祭祀記」より田楽頭関係記事抜粋

(二丁裏より)

田楽頭屋坊乃下行式百六十二石八斗式升なり、興福寺乃唐院より出る也、或説に此下行米の根元ハ大和重相公米を給ハリ、其利價を以て到干今米相渡るといへり、此説不足用、いにしへ九月十七日祭礼ありといへとも其年の米いまだ皆済なし、祭礼ハ新を元とす故に新米成就の上にて執行せんために十一月廿七日まで延引すといへり、右いづれも俗説といへとも古老の伝へなれば書記ものなりし寛文十一戌年までハ頭坊も両院にて執行す、されとも今ハ衆僧すくなくなりたるにより寛文十一亥年よりハ一院にて執行あり 御幣ハ双人頂戴す、しかあれとも先ハ頭坊の主人これをいた、き奉る事第一也、御寺務より御奉所へ御と、けありて十五年の間ハ一院にて打込、十六年目より又いにしへのことく両院にて執行なるとかや九月より頭坊の修覆其外用意等第一とす

(中略)

一、十一月朔日祭礼田楽頭屋へ新座・本座及田楽両人編木太鼓高足差上之

(中略)

一、十一月十七日自「衆中」田楽頭屋へ書帖到来返報有之  
一、十二月中旬の内、於「田楽」頭屋、寺中老若の僧侶参り集、祭礼諸色相談有之、此会合を俗に頭屋振舞と云

(中略)

一、廿六日未明田楽頭屋へ兎両人満寺乃老若出仕、対乃屋衆徒、中門白衣、庭上仕丁列座、其後新座・本座の田楽廿六人参集、田楽法師彦人宛交名呼出装束給之、其後芸能始之、及申尅白妙の御幣二本奉出之、頭人兩人拜之、田楽一鷹請取之、奉幣後若宮の御殿奉納之、頭屋之兎夜官参寺中の老若衆徒供奉

御幣乃事五社とも依奉勸請、五社ともへ新座・本座乃御幣奉納之

田楽法師給装束之覚

- |              |     |
|--------------|-----|
| 一、笛装束狩衣金襴袴段子 | 二具  |
| 一、平装束狩衣段子袴平衣 | 廿四具 |
| 一、筆帷         | 廿六具 |
| 一、強帷         | 廿六具 |
| 一、笛笠花人形有之    | 二   |
| 一、平笠         | 廿四枚 |
| 一、出腰         | 廿六  |
| 一、扇子         | 廿六本 |
| 一、鼻紙         | 廿六折 |
| 一、手拭         | 廿六  |
| 一、裏絹         | 廿六  |
| 一、高足布        | 四   |
| 一、腰皮         | 拾   |
| 一、太鼓         | 六   |
| 一、櫓          | 四   |

一、傘

廿六本

一、足駄

式足

右之外自一臈<sup>カサ</sup>至三臈<sup>カサ</sup>被物被曳<sup>カサ</sup>之、田楽法中中間江糴米五十石  
余給之、右之分田楽頭屋之坊より遣之

本座田楽装束人数事

御幣持ヲ楽頭ト云白木綿衣物并白コロモ重衣ナリ外二人都合三人

森松法師

編木

藤千代法師

笛

梅千代法師

小鼓

智菊法師

刀玉 編木

菊松法師

高足 刀玉 編木

松千法師

編木

吉松法師

編木

長松法師

編木

市松法師

太鼓

千菊法師

太鼓

梅松法師

太鼓

竹千世法師

太鼓

龜松法師

太鼓

以上

新座田楽装束人数事

御幣持右同前

春千世法師

編木

菊松法師

笛

藤松法師

小鼓

福松法師

刀玉 高足 編木

千松法師

刀玉 高足 編木

鶴千世法師

編木

鶴松法師

編木

龜松法師

編木

清正法師

太鼓

千世松法師

太鼓

藤千世法師

太鼓

竹松法師

太鼓

千世若法師

太鼓

以上

田楽法師乃本座新座相替り能をつとむ

菊水

松ともへ  
(古郡)  
ふるかうり

経政

(合補)  
かつほ

しのふ

元禄十三年庚辰年番付

箱崎 雪鬼

常政 ふるこをり

かしわ かつほ

狂言 御福田 くらま参 山行

如此数多し能狂言いづれもおかしなるわらひ奉なり

田楽開口其後各一献あり一献相済、田楽能狂言有

盃台 積交 龜足 酒出る

尅限七ツ過 白幣出御頭坊頂戴田楽うけとり、庭にて捧幣有之、此

白体乃御幣ハ田楽法師頭屋の児の先に立て 春日夜宮参りす、此御幣

ハ若宮神主方江取之

(中略)

田楽之能番数多し唯今南大門にて勤むる芸を中門口と云、道具一臈の  
持候物サ、ラギト云、世間にヒンヅロと云ハ高足なり、此書付ハ衆徒  
記録ノ趣なり、嶋田師より差越なり



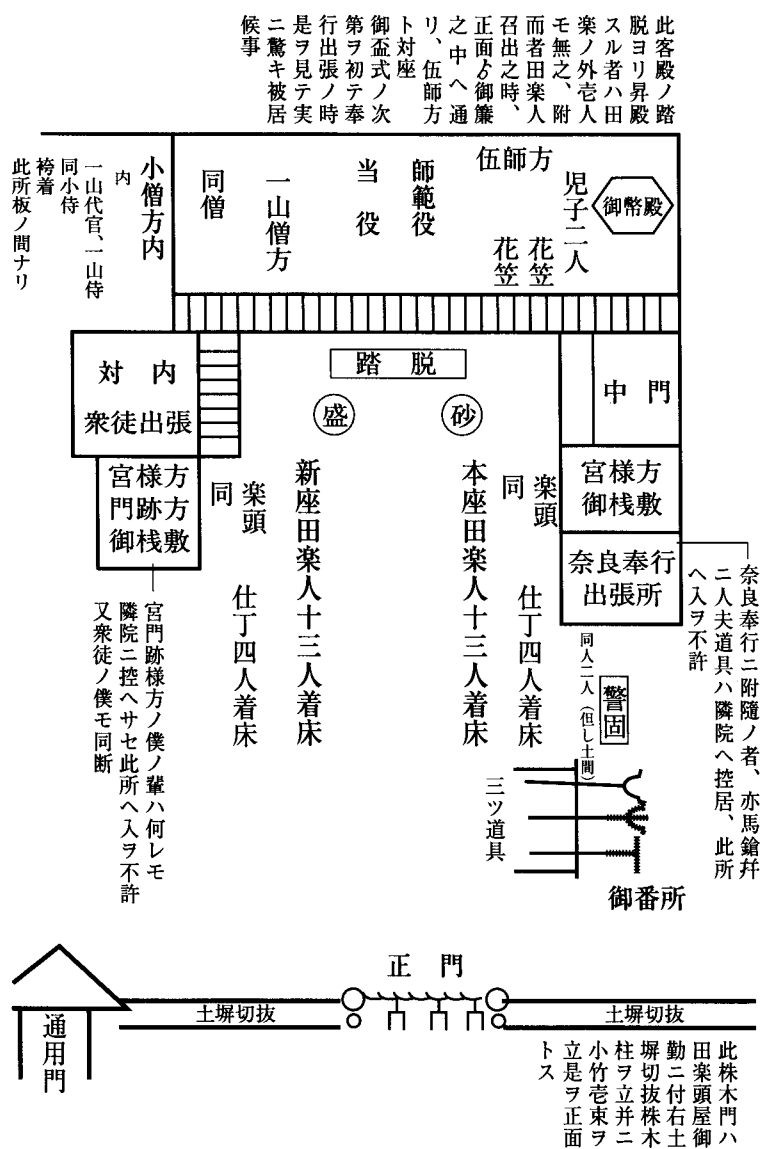


図1 田楽頭屋客殿ノ図「田楽勤務式順実記」（伊藤家文書より）

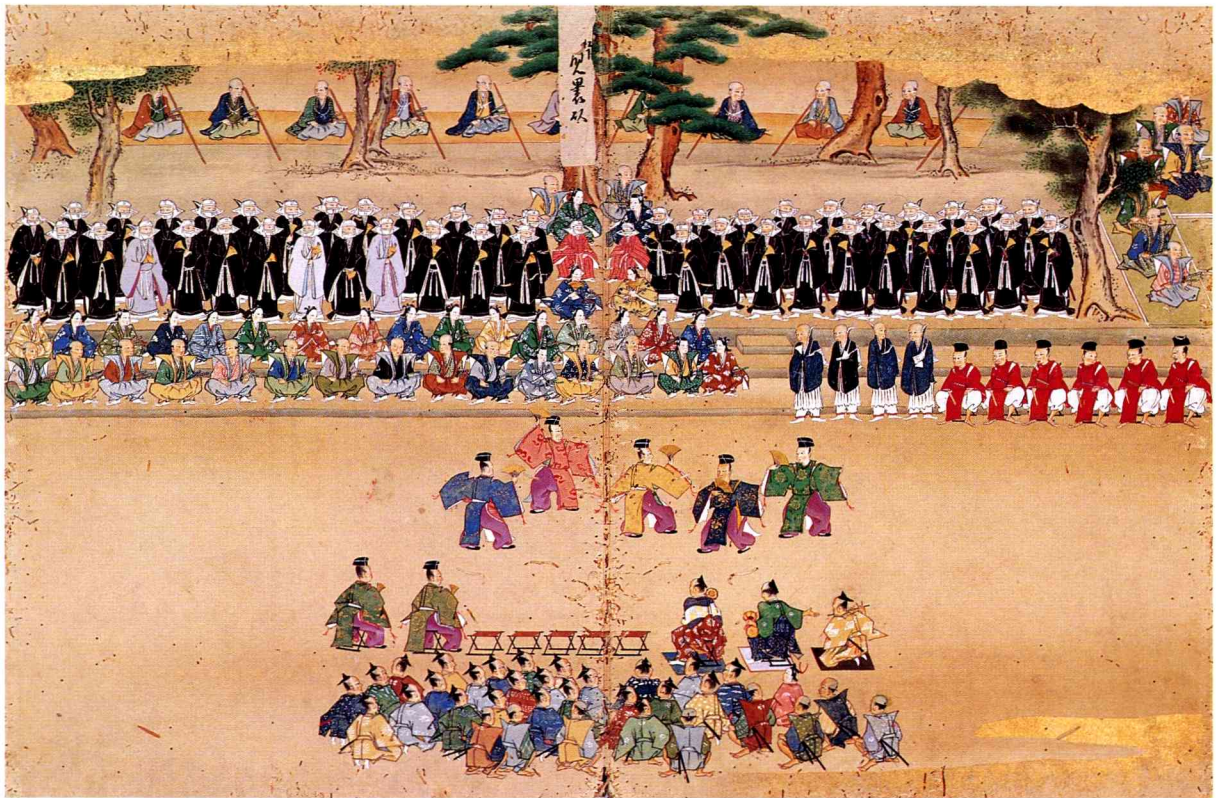


図2 影向松の下における頭坊児裏頭（「春日神幸図」第3冊 国立公文書館内閣文庫蔵）

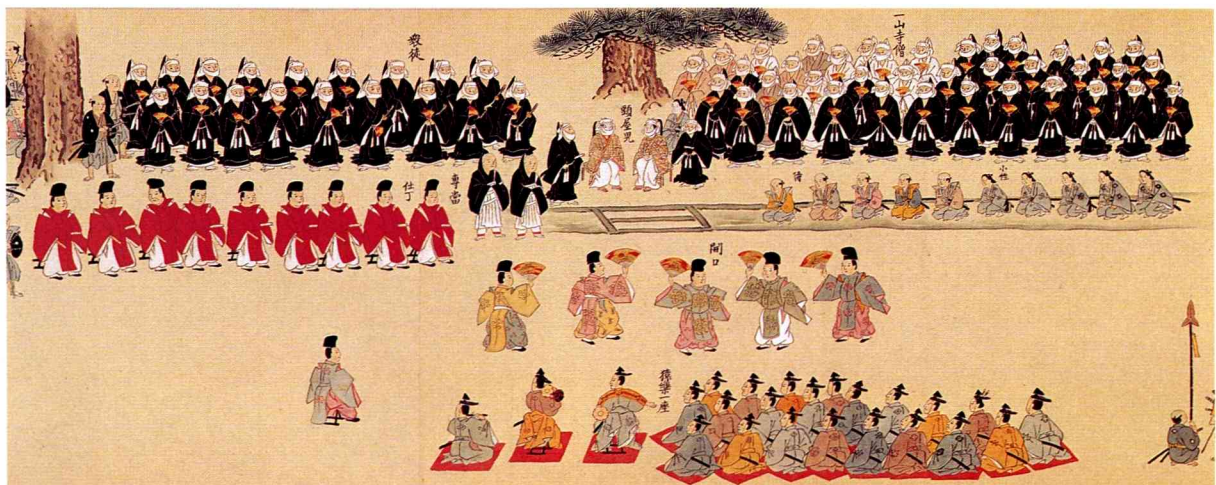


図3 「春日祭礼興福行事」第2巻（国立公文書館内閣文庫蔵）

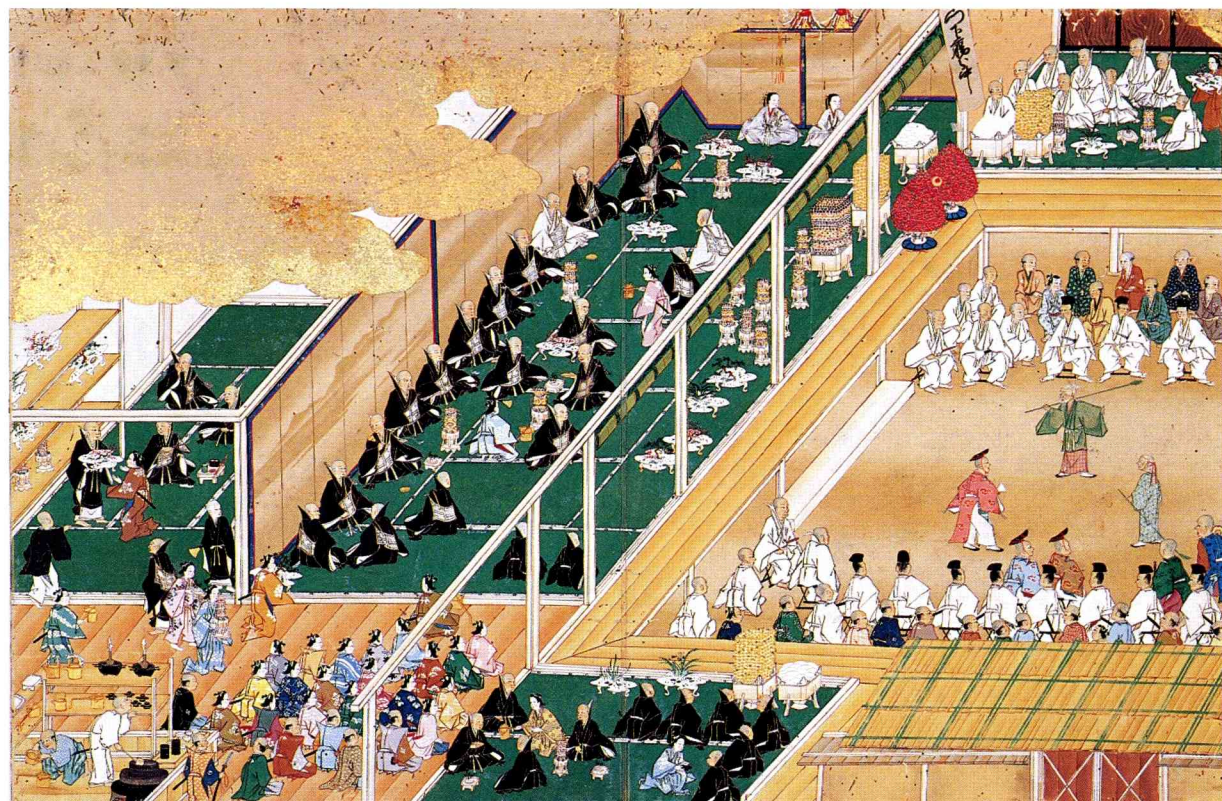
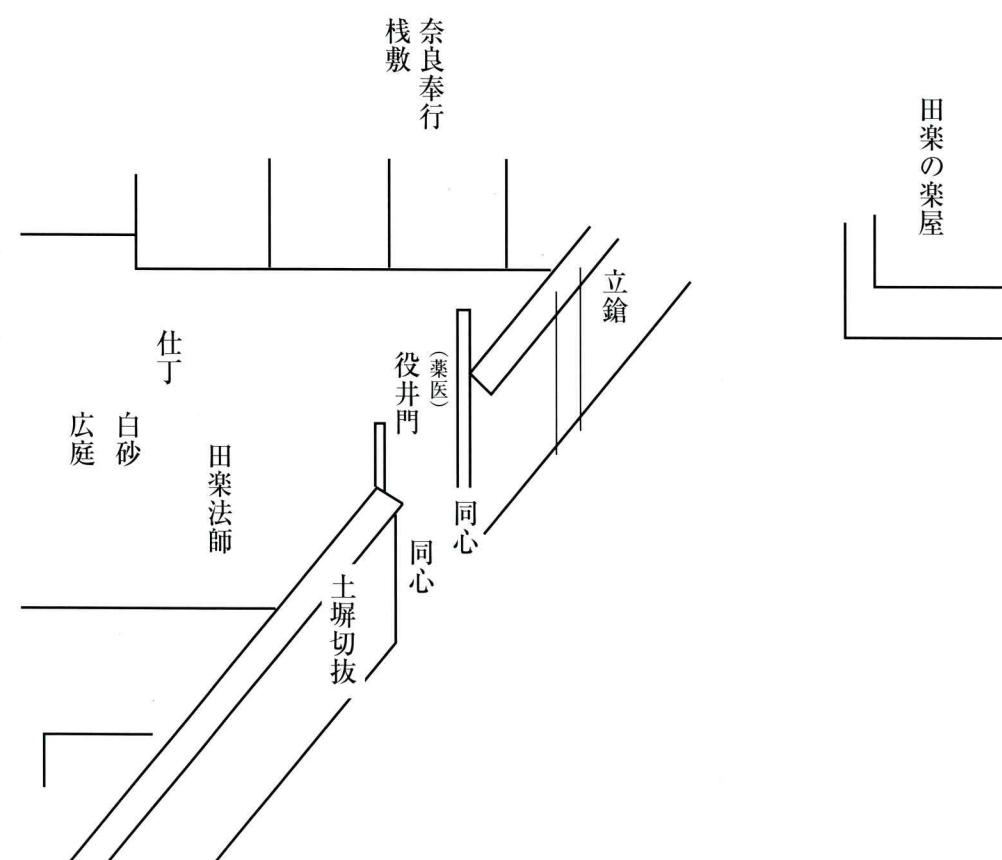
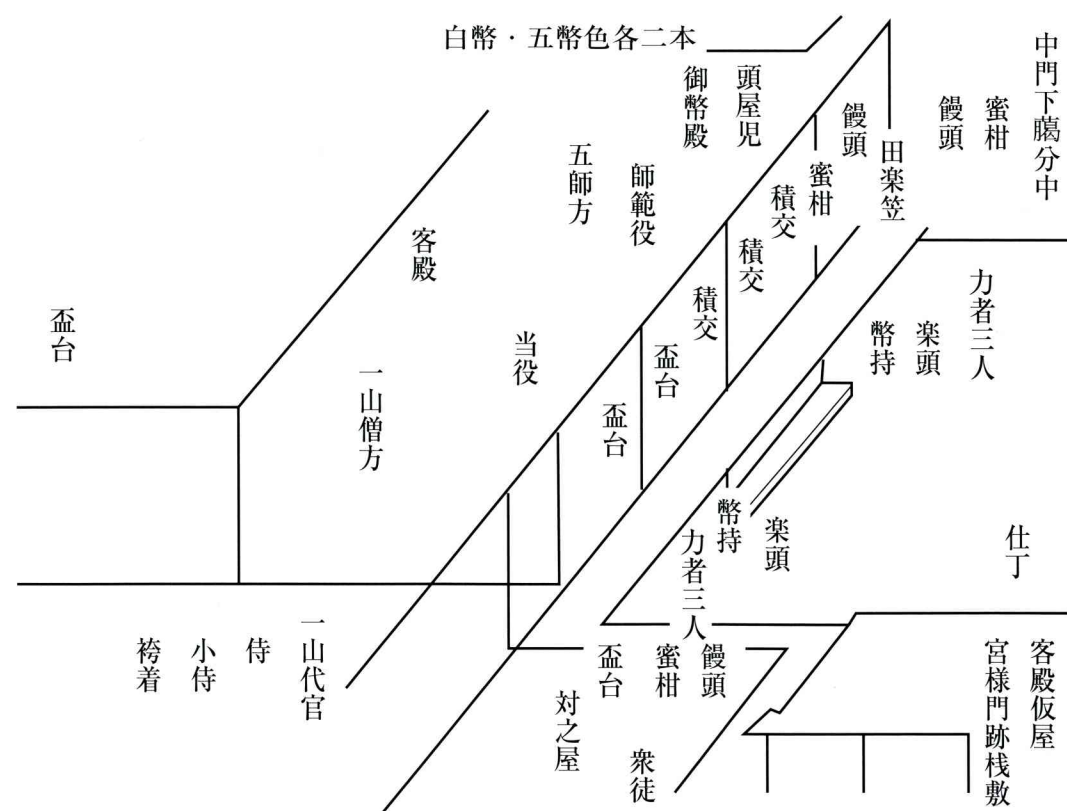
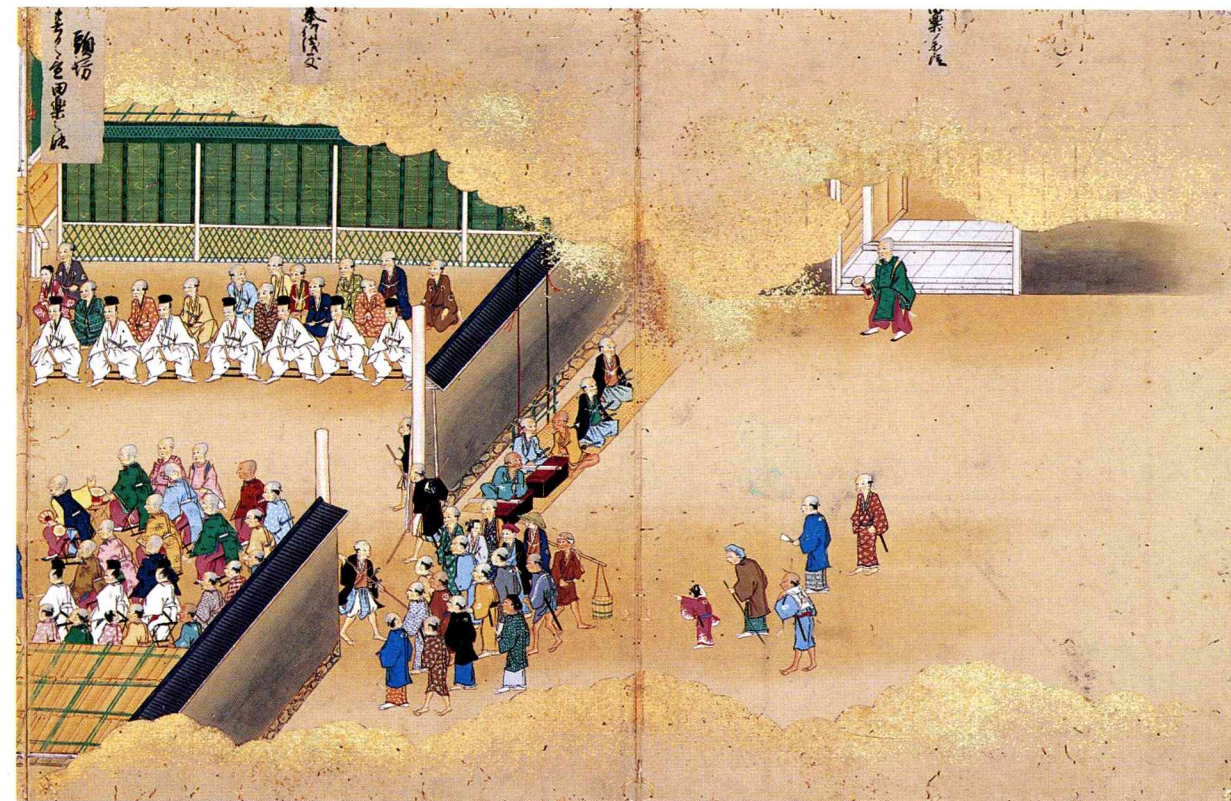


図4 頭坊の田楽能（「春日神幸図」第3冊）



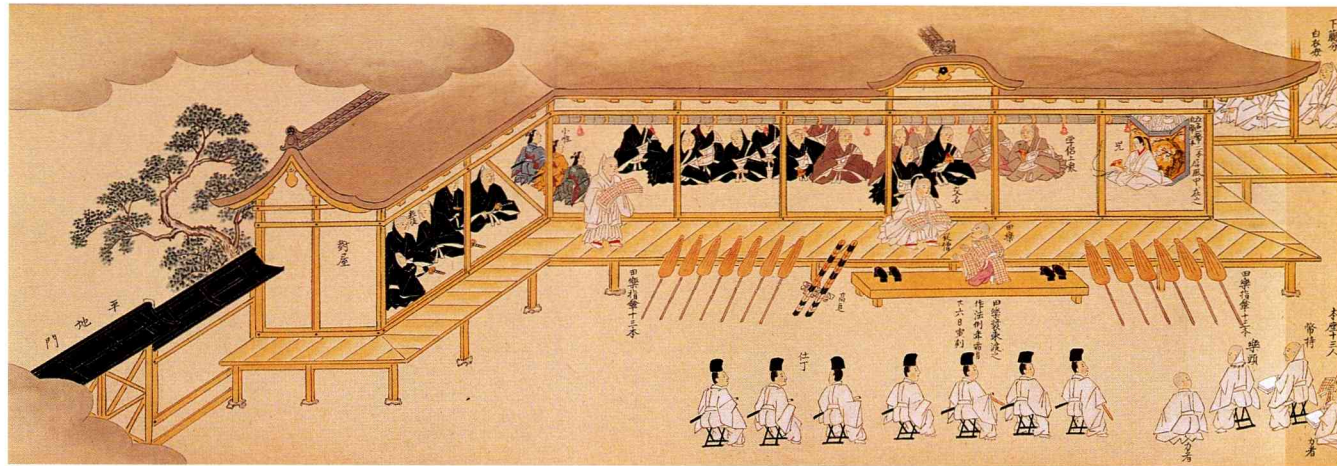


図5 頭屋における装束給の儀（「春日祭礼興福行事」第1巻）

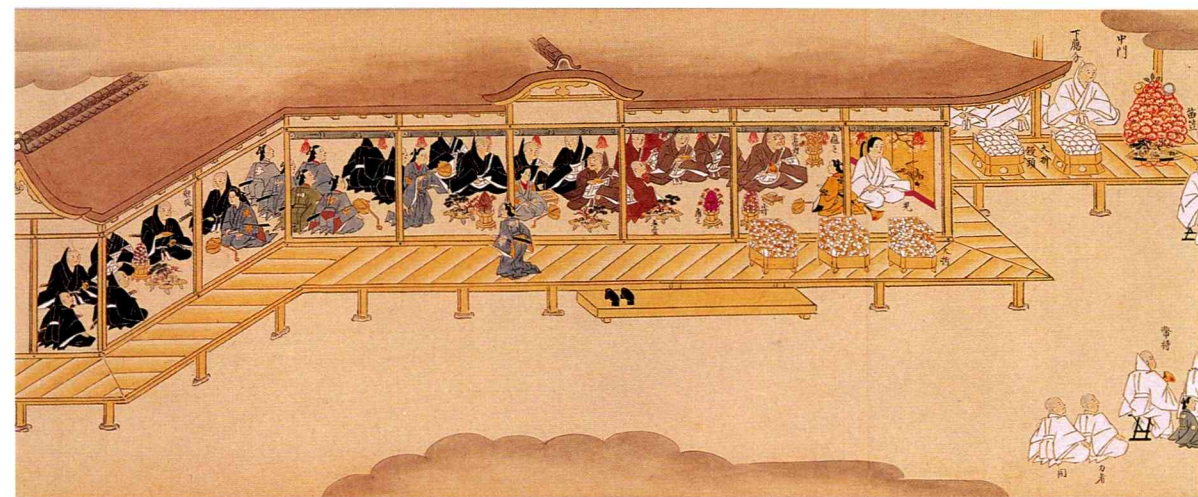
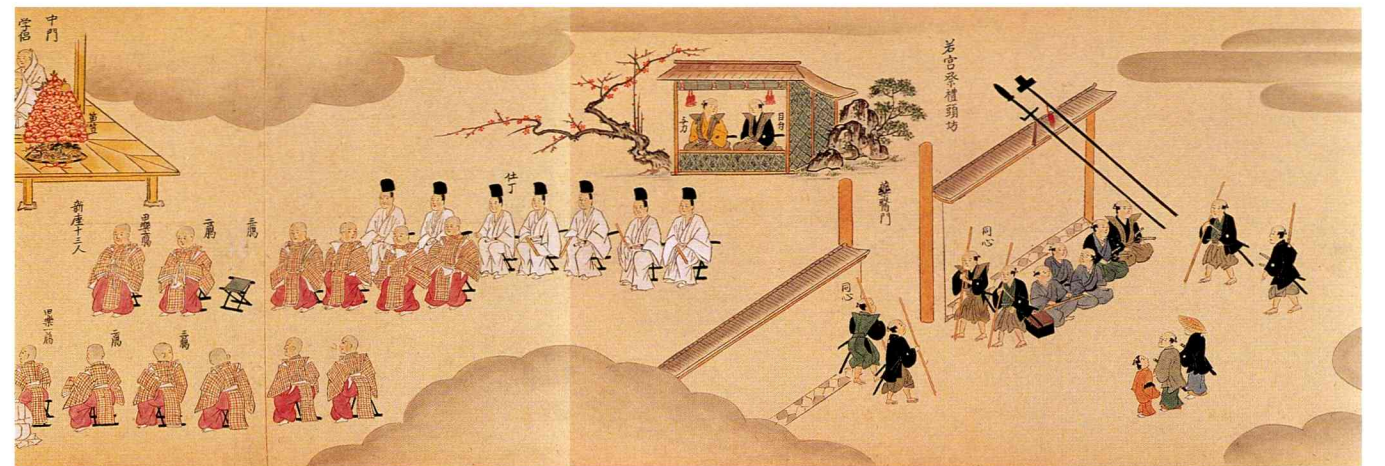


図6 頭屋における田楽能（「春日祭礼興福行事」第1巻）



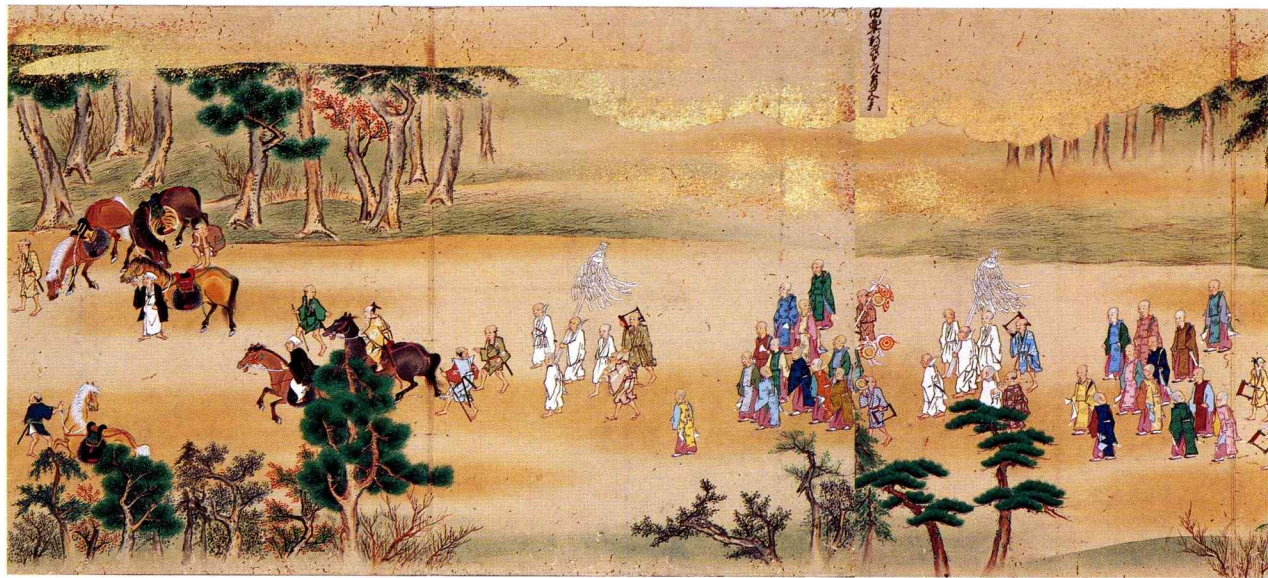


図7 頭坊宵宮詣（「春日神幸図」第2冊）

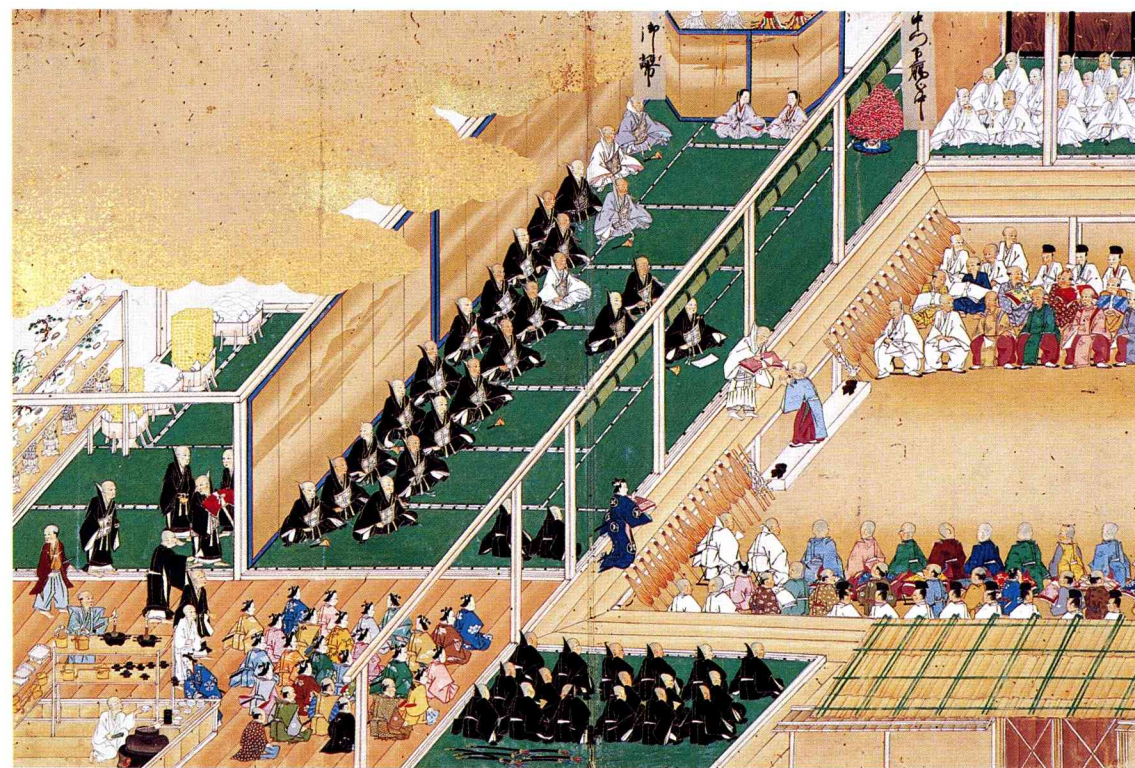


図8 頭屋における装束給の儀（「春日神幸図」第1冊）

